

森林・林業の 担い手を応援！

地域の担い手を応援する 林研活動情報集

平成28年度 多様な担い手育成事業



全国林業研究グループ連絡協議会

森林・林業の 担い手を応援！

地域の担い手を応援する
林研活動情報集

平成28年度 多様な担い手育成事業



全国林業研究グループ連絡協議会

まえがき

長

期の視点で見ると、林業の成長を支える土台は、なんと謂っても人です。林業後継者はもちろん、林業現場で就業する人々の力なしには、将来は築くことはできません。

私たち林業研究グループメンバーをはじめ全国の仲間たちは、こうした林業を支える人材を育成する活動に寄与するため、一丸となつて全国キャンペーン運動を繰り広げてきました。今年度はとりわけ将来を担う未来の就業者、地域の林業後継者・新たに林業に就業したい人々、そして女性に向けたさまざまな支援活動です。

今年度の全国キャンペーンでは、林野庁の補助事業「多様な担い手育成事業」も利用して、次のような活動を実施してきました。

まず高校生や大学生、専門学校生など若い層を対象としたインターンシップ、小・中学生に対する地域の森林・林業を学ぶ体験学習などです。

そして女性就業促進への支援です。人口が増えない時代の日本にあつては、女性の力をさまざまな就業現場に生かしてもらうという基本方針のもと、さまざまな業界で女性の就業促進が進められているところです。林業においても、これは同様で、就業に関するさまざまな情報提供はもちろん、体験研修、さらにはチェーンソー取り扱い等の安全研修なども、私たち林研グループの仲間たちが実践してきました。

こうした活動は、女性のもとより、定年退職者の林業回帰や地域の自伐林業実践者の安全対策にも大いに貢献するものと考えております。

このような全国での支援活動は、私たちの仲間だけで実行できるものではありません。高校や大学等、地域の教育関係者、地域の小・高の先生たち、保護者の方々、そして技術指導などを支援する林業関係者の方々の理解と協力を得て、はじめて効果のある活動づくりが可能になります。

本冊子は、後継者の育成支援、林業就業促進活動等はもちろん、林研グループ等の活動、さらには地域の仕事創出支援に欠かせない生産技術や流通ノウハウを実践活動事例から紹介したものです。

ここには、机上では得られないノウハウ、ヒントの数々が盛り込まれています。活動を振り返り、またこれからの全国キャンペーンをいっそう実り多いものにするために、ぜひ本書を役立てていただければ幸いです。

本書の取りまとめに当たりましては、林業関係高校、大学校等教育機関、都道府県林業普及指導員、市町村、森林組合、森林所有者のみなさん、全国林業改良普及協会ほか、大勢の方々のご協力をいただきました。深く感謝いたします。

平成29年3月

全国林業研究グループ連絡協議会

会長 田爪弥栄

まえがき..... 3

第1部 森林のすばらしさと林業の技術を伝える活動

「薪ストーブ利用世界一」をめざす町で
高校生の林業体験学習

西和賀町森林組合青壮年部「岩手県」..... 8

インテリアデザイン専門学校生
単位認定の国産木材体験ツアー

日光地区木材流通研究会「栃木県」..... 12

判断力を学ぶ

林大生 伐木造材から集材まで

木曽林業研究グループ連絡協議会「長野県」..... 16

ツリークライミングと
チェーンソーカービング体験

高根町林業改良クラブ「岐阜県」..... 20

グラップル、プロセッサ、チェーンソー
高校生への林業体験研修

門川町林業研究グループ連絡協議会「宮崎県」..... 24

地域に根づいた多彩な活動

「鳴子林業と「木」の合う仲間たち」

鳴子林業研究会連絡協議会「宮城県」..... 28

森林公園で高校生の植樹体験	
河北郡林業研究会「石川県」	32
高校生、林業に目覚めた	
森林・林業体験実習	
愛知県指導林家連絡協議会「愛知県」	36
小学生から高校生まで	
町をあげて森林・林業教育に取り組む	
愛媛県林業研究グループ連絡協議会「愛媛県」	40
小学生の学校林手入れ体験	
中学生の森林整備・シイタケ栽培体験	
松阪林業研究会「三重県」	44
発足55年余。ベテランメンバーが伝える	
小・中学生の森林・林業体験学習	
天草林業研究グループ連絡協議会「熊本県」	48
作業中の事故ゼロをめざして	
林業女性のための安全作業研修会	
山口県林業研究グループ連絡協議会「山口県」	52
女性が企画し、女性が教える	
チェーンソー講習会・体験報告会	
福岡県林業研究グループ連合会「福岡県」	56

第2部 私たちのチャレンジ！モノづくり、人づくり

額田木の駅プロジェクト		「絵巻物から読み解く林業技術」講演会	
額田林業クラブ「愛知県」……………	62	群馬県林業研究グループ連絡協議会「群馬県」……………	74
クラフト作成指導		木工クラフト指導	
郡上リーフ・レディース「岐阜県」……………	64	NPO法人森づくり奈良クラブ「奈良県」……………	76
薪割り体験会		「竹取のかぐや」〓竹やぶ対策活動〓	
なんぶの森でつながる会「青森県」……………	66	樹冠ネットワーク「島根県」……………	78
新規就業の支援研修		炭焼き体験講座	
兵庫県指導林家会「兵庫県」……………	68	福岡市林業研究グループ「福岡県」……………	80
チエーンソー講習会		Mスターコンテナで苗木生産	
朝日森林のクラブ「長野県」……………	70	高千穂町林業研究グループ連絡協議会「宮崎県」……………	82
木のボールペン作り体験		ウッドキャンドルで町おこし	
田人林業研究会「福島県」……………	72	あしよる岐志会「北海道」……………	84
平成28年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧……………	86		

第 1 部

**森林の
すばらしさと
林業の技術を
伝える活動**

事
インターンシップ
例

「薪ストーブ利用世界一」をめざす町で 高校生の林業体験学習



町立西和賀さわうち病院の
チップボイラーについて、
町役場林業振興課の内記課長から
説明を受ける



験学習を行っています。

西和賀高校は普通科のみの学校
ですが、学校の協力を得て森林や
林業に関心のある生徒を募って夏
休みに開催して

きており、28年
度も8月8日に
行いました。参
加者は3年生の
男子2名、女子
2名の4名です。

生徒の人数は
少なめですが、
「薪ストーブ利
用世界一」をめ
ざす町の取り組
みを伝える体験
学習を、女性グ
ループ・さわう
ちカダゴの会や
森林組合の協力
も得て行ってい
ます。

西和賀町森林組合青壮年部「岩手県」

地元の西和賀高校3年生を
対象に

岩手県の西和賀町森林組合青壮

年部（吉田修部長、以下、青壮年部）
では、平成24年度から地元の岩手
県立西和賀高等学校（以下、西和
賀高校）の生徒を対象に、林業体



民家の敷地に保管されている薪。
町は「薪ストーブ利用世界一」をめざしている

森林エネルギーの活用に
取り組む西和賀町

西和賀町は奥羽山脈のど真



町内の薪ストーブ利用率は 30%

ん中に位置し、町の総面積 5万9000haのうち森林が82%を占めており、県内有数の豪雪地帯としても知られている町です。平成17年に沢内村と湯田町が合併して誕生した町で、人口は現在約6000人です。

町ではこの広大な森林がその働きを最大限発揮するためには、まず身近な「薪」利用をより効率的・効果的に進められるシステムを作り出すことが必要と考え、平成23年に「薪利用最適化システム構築計画」を策定。「薪ストーブ利用世界一」をスローガンにして、町ぐるみで薪供給システムの構築や薪ストーブ・薪ボイラーの利用拡大、普及活動の展開などに取り組んでいます。

青壮年部は、沢内村森林組合と湯田森林組合の合併に伴い、34年間継続してきた沢内村森林組合青壮年部を解散、平成19年に現在の組織となりました。現在、メンバーは約20名で、平均年齢は60歳です。

林業地でも高校生には林業の取り組みが知られていない

地元の西和賀高校生を対象とした林業体験学習は平成24年度から毎年実施しており、今年度は5回目になります。

青壮年部の為田稔彦事務局長（組合の総務課長）はこの取り組みについて次のように語ります。

「西和賀町では、薪ストーブ設置者への助成や薪割り機の導入、薪ストーブ展示会の開催、そして平成26年には町立西和賀さわうち病院へのチップボイラーの設置など、森林エネルギーの利用に積極的に取り組んでおり、私たち青壮年部も協力させてもらっているのですが、しかし、このような取り組みが次世代を担う地元の高校生たちに意外に伝わっていないということがわかりました。」



高性能林業機械などの操作体験も行った

そこで、この体験学習に取り組み始めたのですが、町の取り組みを知ることでも林業に関心をもってもらい、担い手としての技術者を増やすことができればとも考えて続けてきました」

パソコンを使った管理システム操作体験も

今年度の林業体験学習は、夏休みを利用して8月8日に行いました。

「体験学習を始めた当初は、伝えたいことがいっぱいあって2日間の日程でしたが、まる2日間では生徒も大変だし、教える我々青壮年部のメンバーも時間の確保が大変で、最近はまだ1日にしています」(為田事務局長)。

それだけに1日のスケジュールは朝から夕方までびっしり詰まっています。まず朝8時に森林組合事務所に集まってもらい、まず照井 洸森林組合長から、町の林業や森林組合の話聞きました。それが終わると、デジタル測量器械の操作体験やパソコンを使つての市町村管理システムの操作体験です。林業の仕事の世界もかなり変わってきたので、それらを生徒たちに見てもらおうという趣旨です。

それから2時間ほど事務所の近くにある組合の菌床シイタケ用のオガ粉製造、チップ製造、薪製造の見学です。「生徒たちは木材というと建築物などに使う製材品のイメージしかないんですが、様々な用途があるということを知ってもらえたと思います」(為田事務局



薪割機を見る生徒

れています」。

午後は平成26年に建設された西和賀さわうち病院のチップボイラーの見学。ここでは西和賀町役場林業振興課の内記和彦課長から、薪ストーブの普及状況と西和賀町が進めているバイオマスエネルギーについての話を聞きました。

その後、作業現場（新植地）の見学、青壮年度のメンバーと高校生との意見交換を行い、午後5時半に終了しました。

生徒たちの作文

後日、生徒たちからは次のような作文が寄せられました。

◎「地域を良くして行くためには、やはり地域でお金を循環させていく必要があるのだと感じまし

た。（略）薪ストーブの薪を町の木を使って作ることでそれが可能になるし（略）、木をおが粉に加工して付加価値をつけるのもそう。（略）私は薪ストーブは臭いや煙が出るものだと思うていましたが、最近の薪ストーブはそれらが抑えられているというお話を聞きました。（略）私のように誤解している人に薪ストーブの良さを知ってもらえたら薪ストーブの普及にもつながると思います」

◎「現在はナノファイバーというものが開発され、ものすごく細かくして固めることでより軽くて鉄よりも硬いものができる所知り、感動しました。私は人文社会科学部の地域経済系を勉強したいと考えているので、人口減少など地域の社会問題を考えて、経済面でもっと地元産業についての考えを深めたいと思いました。西和賀町が力を入れていくことについて詳しく知ることができて良かったです」



組合の加工場も見学

◎「今日印象に残ったのは薪です。今でも西和賀町には薪ストーブを使っている人が多くいて、薪の重要性というのが感じられました。（略）お昼に食べたピザもとても美味しかったので、来年来る人にも食べさせてあげたいし、（略）デジタル測量器械やバイオマスエネルギーなどもあることができたので、西和賀について物知りにな

長」。

昼食は、組合が薪を納めている北上市の本場イタリアンピッツアの店です。「店までの移動に時間がかかり、また出費も少ないのですが、生徒たちには大変好評でして、体験学習には必ず取り入

った気分になりました」

◎「今日は森林組合の仕事や西和賀町が取り組んでいる林業に関する話を聞くことができて、貴重な体験になりました。(略)今までこのような取り組みがあるとは知らなかったので驚きました。西和賀の8割以上を占める森林を活用するため、薪をエネルギーに利用する動きが広まるいいなと思います」



イタリアンピッツアの店に薪を運び込んだ後の昼食は、生徒たちにいつも好評

西和賀高校から森林組合に2名の就職内定

為田事務局長が勤務する西和賀町森林組合では、ハローワークを



今年度の体験学習には女子も2名参加した

通じて、平成29年3月に高校を卒業する生徒を対象に新規就業者を募集したところ、西和賀高校から2名の応募があり、4月から就業することが内定しました。事務職員1名、現業職員1名です。卒業予定の高校3年生は47名いますが、そのうち就職内定者は16名です。この16名のうちの2名が林業関係に進むことになったわけで、為田事務局長からも思わず笑みがこ

ばれます。

「応募してくれた生徒は今年度の体験学習を受けていませんが、西和賀高校と私たち林業関係者の長年の連携が先生や保護者の理解・信頼を生み、そして生徒の志望につながっていったものと考えています。これまで培ってきた高校との連携が大きいのです。

私の場合は現在たまたま西和賀高校の評議員を務めています。今回の多様な担い手育成事業のようなものがなければなかなか高校に向くこともなかったし、高校生を対象にした体験学習を開催することもなかったと思います。そういう点からもこのような事業は重要だと考えています」

材の活用に向けた山づくりコンクール

ところで青壮年部の活動は、高校生を対象にした林業体験学習以

外に、町内の「ふれあいの森林」での刈り払い作業や、町が進めているバイオマス活用などの研修会への参加、県内外への研修視察、町内の青年組織が持ち回りで企画する「農森商交流会」の運営、昭和55年から継続している「山づくりコンクール」の実施などがあります。

山づくりコンクールは昨年度まで「育林コンクール」として実施していたもので、「西和賀町でも森林は育成の時代から活用時代に入ってきているので、活用も視野に入れた山づくりを行っている者を対象としたコンクールへリニューアルしました」と為田事務局長。

ちなみに今年度の最優秀賞には小田島薫さんが選ばれました。小田島さんは青森ヒバやエンジュなどの希少な樹種を植栽して多様な森林資源の造成に努めるとともに、林床を利用してワラビやゼンマイなど16種の山菜を栽培して現金収入に結びつけるなど安定的な林業経営を進めています。

*まとめ 編集部

事

インターンシップ

例

インテリアデザイン専門学校生 単位認定の国産木材体験ツアー



植栽地で記念撮影する
インテリアデザイン専門学校の学生たち

日光地区木材流通研究会「栃木県」

川上から川下までの
異業種が連携

日光地区木材流通研究会（以下、

木流研）は、主に栃木県北西部に
位置する日光市と鹿沼市で活動し
ているため、2つの市を合わせた
地域を「日光地区」としてグルー

プ名につけています。日光地区は、

土地利用面積の80%を森林が占め
ており、民有林の人工林率が60%
を超える県内でもトップクラスの
林業地区です。

木流研の会員は、現在は林業家
4名、原木市場1名、製材業者2
名、設計業者1名の計8名（32〜
64歳）。川上から川下に至る異業
種が連携して、国産材、地元の木
材の需要拡大を目指し、主に次の
ような活動に取り組んでいます。

■研究事業

- ① スギ横架材のスパン表作成／
- ② 宇都宮大学との共同研究等

■需要創生事業

- ① インターンシップ／② 出前講
座／③ 木工教室

■新流通開拓事業

- ① 森林認証（SGEC）の導入／
- ② 顔の見える木材での家づくり

■PR事業

- ① パンフレット作成／② ホーム

ページ更新／③ 研究発表会

これら一連の活動は高く評価さ
れ、平成27年度全国林業グルー
プコンクールにおいて最優秀である
農林水産大臣賞を受賞しました。

木材流通システムの改革を主な
活動としている会ですが、「業界
を永続するには、木材需要の拡大
と同時に、職人を含めて後継者育
成をやっていかなければならない
（前会長・齋藤正さん）」という思
いがあることから、設立当初から
毎年、森林・林業体験学習や講演
を行っています。

今年度も東京にあるインテリア
専門学校と、地元の鹿沼専門学校
の学生に向けて林業体験学習ツ
アーや出前授業を行いました。

インテリアデザインを学ぶ
学生に国産木材体験ツアー

8月8〜9日の1泊2日で、東



大貫会長指導のもと、スギの枝打ち作業

京にあるインテリアデザインの専門学校（ICSカレッジオブアーツ）の生徒に向けた国産木材体験ツアーを実施しました。参加者は9名でそのうち女子は4名。高校、大学卒業後に入学した学生もいれば、社会人になってからインテリアを学ぶために入った30代や、留学生などさまざまです。

インテリアに木材が多く利用されているとはいっても林業とはほとんど接点がなく、学校に木造木質を教えられる教授がいなければプログラムありませんでしたが、



手ノコによる伐倒。
倒した木は翌日製材して、卒業制作の材料としてプレゼント

林研メンバーが卒業生だったことがきっかけで、15年前から出前授業を行うようになりました。最初は東京に向いて授業をしていましたが、それが大変好評で、今度は山で実際の仕事を見て体験したいという要望も出てきたため、10年ほど前から実施しています。

1日目は、朝10時に木流研メンバーの齋藤正さんが営む高見林業の山に集合。開校式のと現場作業における注意事項などを確認します。「山に入る前に労働安全規則を伝えて、これを遵守するよう指導しています。例えば、伐倒を見学する際は、樹高の2倍以上離れることなど、プロの職人と同じ意識で作業に臨んでもらいます」。

午前中の作業は、木流研会長の「大貫剛久さん指導のもとスギ苗の植え付けから始まり、下刈り、枝打ち作業です。いきなり刈払機を使わせるのではなく鎌や手ノコを使いました」。

昼食を挟んで午後からは、手ノ

コによる伐倒体験。太さ30〜40cmのスギを汗だくになって、交代しながらノコを動かし数十分かけて倒します。玉切りした後は、2人に1本、丸太を渡して木取りも体験してもらいます。

その後は、ハーベスタによる間伐作業とチェーンソーによる大径木伐採のデモンストレーションを見学。あつという間に伐倒、枝払い、造材までこなす機械のパワーに驚きの声が上がります。手ノコに比べると機械は圧倒的に早く、安全に作業できることを実感してもらえたようです。

現場体験の後は、栃木県の林業研修施設「21世紀林業創造の森」に移動。県西環境森林事務所の職員から栃木県の森林、林業、木材について座学講義を受けました。

木材に関する職業に就いてくれることだって大変意味のあること

翌日は6時起床。朝食前に林業機械の操作体験。グラップル操作からフォワーダでの積込み、荷降ろし作業に挑戦しました。

次は、木流研メンバーが営む「鹿



井深大記念館の構造と部材強度などについて勉強

沼原木市場」で材木や選別機械、珍しい樹種の丸太などを見学。
 続いては、木製品の総合メーカー「星野工業」へ。工場長さんから丁寧な説明を受けました。
 さらに、ソニーの創業者・井深大氏のコレクションが展示される「井深大記念館」を観覧。伝統的な木組みの技術と樽をつくる構法を応用した建物です。木流研メンバーの設計士が、構造や部材強度



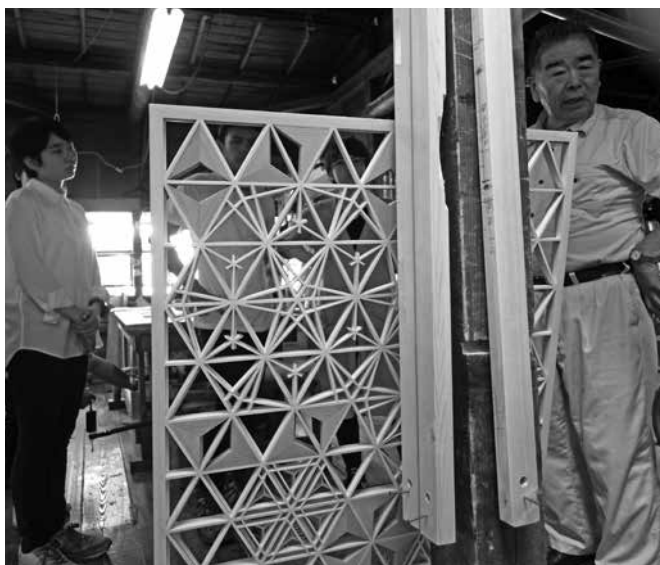
西村製材所の見学。自分たちが伐倒した材を製材してもらう



鹿沼原木市場で材木や選別機械、珍しい樹種の丸太などを見学

などに関するポイントを解説しました。
 そして、組子得意とする企業「豊田木工」を訪ねて、組子職人の素晴らしい技術の間近で見せてもらいます。組子キットで製作体

験もしてもらいました。
 最後に訪ねるのは西村製材所（木流研メンバー）。1日目に山で伐採した丸太がすでに運搬され、それを学生たちの目の前で製材してもらい、挽いた材はプレゼント。自分たちが伐倒して木取りも行った材を卒業制作の材料に活用できるということで大変喜ばれました。
 締め、修了証書を渡してツアーを終えました。
 最初は課外授業という扱いだったこのツアーも、今は単位をもら



建具が有名な鹿沼地域。組子の職人の技を見学後、組子キットを体験

える授業に昇格されました。「この子たちも後継者。木材に関する職業に就いてくれることだって大変意味のあることです」と齋藤さん。実際にこのツアー参加者が卒業後、林業に就いたという実績も出てきているそうで、「俺たちのモチベーションも上がります」と続けます。今後も引き続き、この学校の生徒たちに体験ツアーを通じて林業・木材業を教え続けていくつもりです。

鹿沼共同高等産業技術学校で 出前授業

12月3日、鹿沼共同高等産業技術学校に通う全生徒60名（1、2年生合同）を対象に、出前授業を行いました。この授業は平成25年から毎年、座学と現場実習を1年おきに交互に行い、1年生2年生が両方の授業を受けられるようにしています。今年は座学の年です。生徒は、社会人1〜2年目くらいの大工や設計士、板金業、造園業の後継者といった若い就業者です。平日は働きながら週1回通っています。

普段から木材を扱っている大工

さんですが、山の木がどう育ち、どうやって製品になったのか意外と知らず、プレカット工場で加工されたものが、彼らにとっての「木」でした。

そこで、「山の木から家の木へ」というタイトルで、「世界と日本の森林・林業という仕事」、「木材・製材と流通」について授業を行いました。

前半は森林・林業の現状や、森林の働きから、植え付け、下刈り、間伐、皆伐といった実際の施業について説明しました。

第二部は、木の構造から始まり製材や木取りの仕方、さらに乾燥方法などについてです。スギやヒノキの見分け方や、板目や正目のことを知らない生徒も多くいましたが、仕事にも役立つ内容が盛りだくさんだったので関心をもって耳を傾けます。

また、木流研が取り組んでいる県産スギの強度試験の結果も紹介し、県産スギが使い方によってはベイマツに劣らぬ強度があり、梁、桁等の横架材として十分使えることを伝えました。ほかに、スギの赤身部分は科学的な強さがあっ

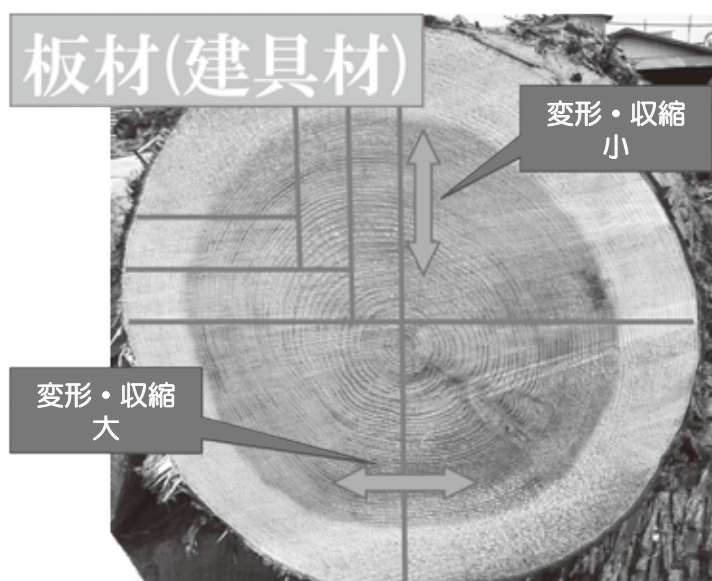
て、腐りにくく水回りや外壁に使えること、シロアリにも強いこと

など、スギ材の利用幅が広いことを知ってもらう良い機会になったようです。

木材の乾燥についてメリットなどを挙げる

と、真剣にメモを取っていました。授業を受けた生徒からは、「これまでコンクリートベースだったものを木造にしたい」、「今までは親方任せ、材木屋任せで買っていた材木資材を自分で選んで使い始めたい」という声がありました。また「受講した生徒が電話してきて、林研メンバーの材木屋さんを紹介してほしいと言ってきたりもしました」と、確実に波及効果が出ていることを齋藤さんは嬉しそうに語ります。

板材(建具材)



木取りの説明。「柁目材は反りにくく狂いも少ないが、板目材に比べると幅広材が取りにくい」といった説明をパワーポイントを使ってしています

*まとめ 編集部

判断力を学ぶ 林大生 伐木造材から集材まで



チェーンソーの刃の目立ての出来上りをオガクズで確かめる

木曽林業研究グループ連絡協議会

〔長野県〕

全国植樹祭関連行事で活躍

木曽林業研究グループ連絡協議

会（以下、協議会）は、木曽地域の5つの林研と林業士の資格を持つプロ集団と木曽林業士会とが協

力して活動しています。日頃はそれぞれの地区で活動していますが、総会など代表が集まり情報共有をしたり、大きなイベントを共同で行います。長野県は今年、全国植樹祭の回り年だったので、当協議会からも全国林業後継者大会など関連行事に積極的に参加しました。協議会の全体企画として昨年まで3年に渡り「薪割りツアー」を実施してきました。薪ストーブを設置する家の増加に伴い、薪需要が高まり、地域の山の整備に関心をもってもらうチャンスだと考えたのです。

当日、参加者の前で伐倒するほか、前日までにメンバーが伐採しておいたナラなど広葉樹を、参加者と共にロープウインチで引き出し、チェーンソーで玉切つて薪割機や斧で薪にします。終了時には軽トラ一杯分の薪を持ち帰ることができるとあって毎回募集定員を上回る応募がありました。

しかし、今年度は企画自体を立ち止まって考えることにしました。それは薪欲しさで広葉樹にばかり目が向き「山づくりに着眼してもられない」という問題意識からでした。柴垣嘉和会長は「薪を採って終わりではなく、どうやって循環型の森林づくりを一般の人たちに伝えようか」と、次年度からの活動を模索しています。

プロの指導が刺激に

協議会の構成団体の1つ木曽林業士会は、後継者育成を目的に平成18年度から長野県木曽青峰高等学校森林環境科（以下、木曽青峰高校）と長野県林業大学校でインターンシップを行っています。

7月5日、メンバーの正沢林業の樋口さんが木曽青峰高校の生徒にチェーンソー実習を、同校の新開キャンパスで行いました。

生徒は班になり、トビで丸太を支えて立たせ1人がチェーンソーで受け口を入れる練習です。1本の丸太が用意され受け口を入れた後、追い口を入れました。

11月11日は、木曽林業士会（以下、林業士会）の吉川正樹会長がワイヤースプライスの講習を行いました。谷あいの急峻な斜面が連なる木曽地域では今も架線集材が

頻繁に行われており、「アイ加工はさまざまな場面で使われるので身につけておいて欲しい技術です」と吉川会長。生徒により手先の作業が得意な生徒や遅い生徒がありました。午前と午後1本ずつアイを仕上げました。生徒の1人が「難しかったがプロから教えてもらえ刺激になった」と話していました。

**取り組み意識の高い
林業大学の学生**

長野県林業大学（以下、林大）2年生への実習が計4回行われました。

森林・林業に係る基礎的な知識と技術を身につけることを目的とした林大。学生は卒業後現場での仕事を希望する人が多く、プロ集



3人1組になってトビで丸太を立て、受け口を入れる練習をする生徒たち



真剣な表情でワイヤー網の指導を受ける生徒たち

団による指導が受けられるこの実習は「本当の現場を味わうチャンス」と意欲的に参加します。

林業士会では林大での指導を十数年間続けており、特に今年は自分で購入したチェーンソーや道具類を持参する学生が多数おり「真剣さが強かった」そうです。

日本一の刃は 石を切らない

9月28日、林業士会の吉川会長とメンバーの田中淳司さんが目立て講習を行いました。伐木造材資格を持つ学生たちはチェーンソーの扱い方は取得していますが、よく切れる刃がなぜ大切なのか、どうやって研ぐのかを改めて習いました。

吉川会長の開口一番の言葉は「あなたは名刀正宗で石を切りますか？ 切れない刃を使っている人が石に当てるのです」。山仕事をする人にとってチェーンソーの刃は料理人の包丁や大工のカンナに匹敵するものだ。「切れる刃」の大切さをわかりやすく解説しました。

吉川さんの指導は、①チェーン



真剣な表情で刃を研ぐ学生たち

ソーを抱えて研ぐと脇が開いてヤスリをまっすぐに突き出せないの
で必ずクランプで固定させてから
やるように。②小さな刃は大きく
できないので、大きい方を小さく
すること。③刃を揃える誤差は0・
1mm以下に。

実習の初日に目立て講習をやり

始めたのは、せっかく立木を前に
しても切れない刃を使っていたら
練習にならず、もったいないと感
じたからです。

指導を受けた林大生の1人は
「目立てで何を目標にすればいい
のか、吉川さんの指導で理解でき
ました。森林組合に就職が決まり、

日本一切れる刃で
仕事をします」と
話していました。

実習体験 喜びは心で かみしめる

10月21日、王滝
村有林の50年生カ
ラマツ造林地で間
伐の伐木造材実習
を行いました。

調査・選木は事
前に授業で済ませ
ていました。伐倒
の方法は、学生が
木の重心を見て伐
倒方向を示し、そこに目印のピン
クの旗を立て伐倒木で旗を倒しま
す。

胸高直径30cm超のカラマツを前
に学生の緊張が高まります。林業
士会のメンバーらが受け口の角度
や追い口の入れ方など細かく指示
を繰り返しながらじっくり作業が
進められ、見事にピンクの旗を倒
す学生。つい声をあげて喜びたく
なる瞬間ですが、吉川会長は「ワ
ー」となるのは止める。あなたた



伐倒方向の確認をする。足元にある旗に当てるのが目標

ちは林大の学生なんだからね、当
たり前の顔をしていなさい」と指
導します。競技のように感じてし
まいがちな学生に「木の命を断つ
ことでもあるんだよ」と。黙って
喜びを心でかみしめる学生たちの
表情には誇りがにじみます。

状況に応じとつさに 考える工夫をする

3回目の実習は10月31日王滝村
有林で集材と造材が行われました。

前回伐倒したカラマツを簡易ウィンチを使って全幹で引き出し、土場で造材します。樹高20mほどあったカラマツは株や立木に引っ掛かり、すんなりとは動いてくれません。学生たちはその場できっと考え判断を迫られます。それを学ぶための実習でもあります。滑車を使って材の方向を変えるなど知恵を絞り出す姿が見られました。

土場に出た丸太は4m造材の指示が出ており、学生らは有効に採材する視点を学びました。

4回目の実習は11月7日、同じ場所で行いました。伐倒集材はこれまで全てがスムーズにいったわけではなく、なかにはかかり木になつて処理できないまま放置して



受け口を入れる学生の手元を指導する林業士会メンバー

おいたものや、方向を極端に変える必要がある難しい伐倒などが残されています。危険な処理になるものは、林業士会メンバーが解説しながら、チルホールやフェリングレーバーや滑車など道具を組み合わせた安全な処理の手本を見せま



造材は4mで。どう採材すれば価値が上がるか指導を受ける

した。

林研、各団体が連携しながら後継者育成を

自身も林業会社の社長である吉川さんは、「木や山を見る目が育つまで10数年かかる」と言います。

林業士同士、さらに連絡協議会各団体とのつながりを大切に後継者育成と森林整備への意識を高める活動に意欲的に取り組むつもりです。

「林業従事者が増えるより木の成長の方が早いかも知れない」と。そして林業をとりまく状況を考えたとき、現場で仕事をしてほしいが現実はいきなりとは感じています。しかし、希望する若者がいる限り、自分がこれまで培ってきたものは伝えたいと思っており、長い目で成長を期待しています。

現役で働く林業士会メンバーたちが平日の実習に携わるのは大変なことですが、今後

事

インターンシップ

例

ツリークライミングと チェーンソーカービング体験



サドルを装着し、ロープを使った登り方を
教わる生徒たち(ツリークライミング体験)

高根町林業改良クラブ「岐阜県」

地元愛が活動の原点

北に乗鞍、南は御嶽山がそびえる高根町は、高山市街地から約40

km離れ、山林が97%を占める山里です。交通機関が発達する以前には、野麦峠をはじめ峠道が交わり、飛騨と信州を結ぶ物流の要所

でした。「この景色を見た人はみんな感動するんだよね。過疎だけど、こんないいところ他にないですよ」。そう話すのは高根町林業改良クラブ（以下、クラブ）の上田康美会長。生まれ育った地域への愛情がにじみ出ています。

クラブの設立は昭和後期に遡りますが、林業の低迷期とともに活動は停滞し、それを復活させる形で平成17年に上田会長が引き継ぎました。高根町に限定せず、高山市内各地へも呼びかけ、現在は新たな会員5名が参加しています。

活動の柱は高校生へのインターンシップと地域の子どもたちを中心にしたツリークライミング体験会。毎年同じことをしては参加者に飽きられ、会員にも進歩がないという考えから、新しい企画を織り交ぜ変化を持たせながら継続しています。

子供たちに森林の大切さを伝え、

楽しませたい。そして大人になったとき故郷の森を覚えていて欲しい、という願いが根底にあります。

特殊伐採を見学

当クラブでは毎年、岐阜県立飛騨高山高等学校環境科学科の生徒にインターンシップを行い、今年で5回目を迎えました。

11月20日に実施し、日曜日にもかかわらず1年生と2年生の希望者10名が参加しました。

今回の内容は午前中、大雪で被害を受けた枯損木の処理方法を見学、午後はツリークライミング体験です。

まずは全員でチェーンソーの刃の目立てからスタート。道具を整えると心が整います。生徒たちは授業で習って経験しているものの、刃に当たったヤスリを真つすぐに突き動かすのがなかなか難しく、2人1組になってお互い動きを確認

し合います。「人のフリ見てわが身を正すってやり方だね」と上田会長。

次いで、特殊伐採を見学します。実習場所の同校山田キャンパス演習林では雪害木が多数発生し危険なため、当クラブがボランティアで処理を手伝っており、生徒たちにもその処理方法を見学してもらうことにしました。

幹の中ほどから大きく折れ曲がったアカマツ。最初によく観察します。通常の伐採では折れた先端が落下したり、幹が裂けたり、倒



真剣な表情で目立てに取り組む生徒。ヤスリを当てて腕を真っ直ぐに突き動かすのが難しい



演習林の枯損木

れる方向がわからないなど、生徒たちに考えられる限りの危険を予測してもらいました。いかなる場合でも安全が最優先であることを強調した上で、上田さんたちは枯損木の下に入り込まない安全な位置からスローラインを使って先端部にロープ掛けします。生徒らは高い技術と特殊な道具に目を輝かせ集中。そして倍力システムにローププラーの組み合わせの解説を受けながら一緒にセツトしていき

ツリークライミングで木と遊ぶ

ました。伐倒方向の確実なコントロールが難しい中折れ木の伐倒ですが、ねらった方向に確実に倒れるようロープで引っ張る方法を初めて見学し、無事に倒れると「すごい」と感動の声があがりました。

午後はお楽しみのツリークライミングでした。ツリークライミングとは、ロープやサドルを使い安全に木登りする方法で、当クラブのメンバーは全員がTCJ（ツリークライミングジャパン）にも加盟しており豊富な経験を持っています。

「私たちが生徒たちに一番伝えたいことは、将来林業に就いて欲しいという前に、森って楽しい、木にも命があることを知ってもらいたいのです」。会員みんな



難しかったが途中でリタイアした生徒はおらず、全員が作品を仕上げた（チェーンソーカービング体験）

なの願い通り、木に登る生徒たちの姿は天真爛漫、実に楽しそうです。木と遊び森林を身近に感じた

日になったことでしょう。
5人のメンバーは全員現役で仕事をしています。中には消防士

部活でチェーンソーカービングを習う

がいて「救命救急のプロがいてくれるから私たちの活動も心強いですよ」と上田さんは笑います。ツリークライミングは、県内の他の林研グループから児童生徒への体験会をしてほしいと要請がかかり、当クラブとの交流が深まっています。

チェーンソーパフォーマンス協会の代表も務める上田会長。同校部活動の環境リサーチ部生徒からチェーンソーカービングを習いたいと申し込みがありました。部員



教わった通りにロープを操作し自力で登る生徒

は全員がチェーンソー取り扱い資格を持ち、中でも特に熱意のある希望者9人が参加して10月1日に行われました。

立体の作品をイメージする力とチェーンソーを自在に使いこなす技術が求められます。「見ているよりずっと難しい」と言いながらも途中で投げ出す生徒は1人もおらず、1日かかってそれぞれの作品を仕上げました。

文化祭でパフォーマンスだ

上田会長がチェーンソーカービングを教えた中にとっても筋のよい

生徒が目につきました。2年生の吉本君です。ひよんなことから上田さんと2人で同校文化祭「ひのう祭」でクイックカービングのパフォーマンスを披露することになりました。



カービングの指導を受ける環境リサーチ部の生徒たち

ンソーの調子が悪いことを見抜き、自分のを貸し与えました。感覚を取り戻した吉本君、仲間から声援を受けて格好も決まっています。没頭すること約15分、リスの姿が削り出されました。上田会長もほぼ同時にウサギとリスの完成。会場から盛大な拍手が送られました。吉本君の青春の1ページとして大きな自信につながったことでしょう。

経験を重ねた先輩のアドバイス

同校卒業生でもある上田会長は、先輩として仕事や進路について

10月22日、晴天の下、数百人の生徒が見守るなか、吉本君と上田会長が舞台に立ちました。吉本君は1体、上田さんは2体同時に取りかかります。緊張もあつてかスタートしても手の動きが悪い吉本君。上田会長はチェー

相談を受けることがあります。「高校を卒業したら林業会社に就職したい」と話す生徒に「専門学校で勉強してからにしたらどうか」とアドバイスしました。専門の知識と技術を身につけ、より高いレベルを目指せる人になって欲



文化祭でクイックカービングを披露する吉本君と上田会長。
舞台を取り巻いて観る生徒たちに配慮し、植物性オイルを使用した

しいと考えたからです。誰にでもそう言うのではなく、家庭の経済的条件やその子の性格などを考えて助言をするようにしています。「次回はログハウスの勉強をしてみませんか」。上田会長の頭の中にもう来年の企画が浮かんでいます。長年ログハウス建築にも取

り組んできた経験を生かし、生徒たちに丸太の使い方や組み方を教えてみようかと考えているのです。インターンシップ活動には高校からも期待が寄せられます。

＊まとめ 編集部

事

インターンシップ

例

グラップル、プロセツサ、チェーンスー 高校生への林業体験研修



宮崎県立門川高等学校総合科の2年生
40名(女子21名・男子19名)に
林業体験研修を行った

門川町林業研究グループ連絡協議会 かどがわちよう

〔宮崎県〕

平均年齢37歳の
若い林研グループ

日向灘に面した門川町は、漁業の町として知られる一方、町の約84%を占める森林は、長い日照時

間と温暖多雨な自然環境から、豊かな森林資源を形成しています。

そのため、美郷町、諸塚村、椎葉村などの林業が盛んな近隣市町村と共に、耳川、五十鈴(いすず)川流域として、木材生産が活発に行われている地域でもあります。

門川町林業研究グループ連絡協議会(以下、門川林研)は、林業従事者を中心に、山林を所有する会社員や建設業者、大工などの会員28名で構成されています。その平均年齢は37歳。会長の加賀正憲さんも36歳という若いグループです。

これまでの活動では、小学生や漁業関係者たちとの植樹や、会員が作成した積み木を使った木育イベントなどに取り組んできました。が、昨年には、4mのスギの丸太で餅つき用の櫓を作りました。地域のお祭りで大活躍したことからTV取材を受け、ユニークな活動

を展開するグループとして評判になっています。

「自分たちのやりたいことに楽しみながら取り組んでいる」という林研グループですが、その活力は、やはり、会員の若さが後押ししているようです。

「会が発足して20年近くなり、高齢になってきたメンバーの方たちには、活動が体力的に負担になっていた」と感じた加賀会長は、会員対象を60歳までとする年齢制限を設定し、「OBのみなさんには、なんだかだんとお願ひしてサポートしてもらうことも多いけど、体を動かすのは若い者」という体制に変えました。さらに、「消防団活動などで出会った若い人に、山を持っているなら林研に入れよ」と声を掛け続け、若者の輪を広げていったのです。

年1回の林業体験研修に 変更し、集中力を高める

活発な林研活動を展開するなか、その中心に位置付けられているのが町内唯一の高校である宮崎県立門川高等学校（以下、門川高校）での林業体験研修です。門川高校は、農林業後継者を育成する農業高校を前身とし、林業関係への進学・就職実績も多いことから、平成18年度より林研による林業体験研修を実施しています。

平成18年当初は、丸太切りなどチェーンソー操作のみの研修でしたが、平成22年からは、「今の時代は機械を使わずに林業なんてできないから」と、グラップルやプロセッサを使った林業機械の操作実習も行うようになっていきます。

また、昨年までの林業体験研修は、冬期に実施していましたが、今年は7月27日の開催となりました。実は、昨年までは宮崎県の主催で、門川高校生を対象とした林業研修が夏期に実施され、冬期に門川林研が再度、林業研修を行っていました。そのため、生徒たちは経験を重ねることができた反面、

新鮮さに欠けた体験となり、集中力が落ちてしまう傾向が見られました。そこで、今年度からは2回実施していた研修を、県と林研が合同で開催することとし、午前中は県が原木市場等見学と森林に関する講義を行い、午後から林研による林業研修をすることとなりました。

夏期の開催になったことで、素材生産に携わっているメンバーには、「梅雨明けのこの時期は、伐り出した材の皮が剥けやすいし、

虫が入りやすくて材価が下がるので、仕事の手が空く時期」となったことで、スタッフの確保がしやすい結果にもつながりました。

林業の現場をイメージさせながらプロセッサ、グラップル操作を指導

研修日、高校の中庭には、この日のためにリリースしたプロセッサとグラップルが据えられました。さらに、メンバーの施業現場から4mのC材が20本運び込まれ、持

参した6台のチェーンソーも並びます。メンバーは朝から目立てに余念がなく、「安全のためにも生徒に切れないチェーンソーは使わせられないという思いもあるし、林業者としてのプライドもあるから」と、いつもにも増した念入りの手入れで、総合学科（栽培ビジネス系列）の2年生40名の生徒たちを迎えました。

プロセッサの指導を担当したのは、素材生産業者として山仕事に技術に長けた加賀会長です。ただ、



グラップル操作は、オペレーター技術の高いメンバーが指導した



プロセッサの操作では、材を掴んで、長さを調節して切断し、旋回して材を置くまでの一連の操作を行った

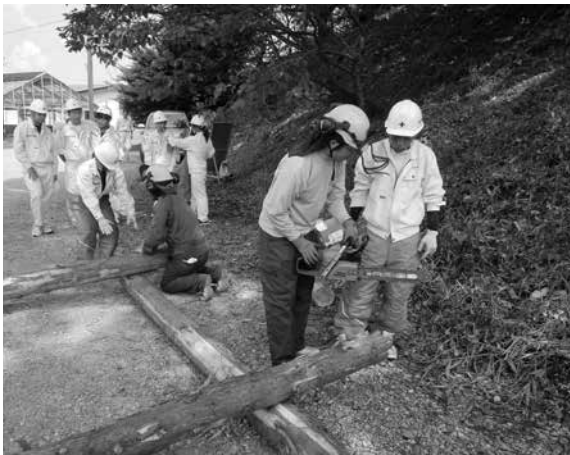
普段の仕事ではプロセッサを使うことは少ないため、「朝からなんども操作方法を思い出しながらシミュレーションして」、生徒たちに付きっきりで操作方法を教えました。指導で特に気を付けたのは、このプロセッサでの造材が、実際の伐出作業の流れのなかで、どういう工程なのかを理解させることでした。山の中で伐倒された立木がどういう手順で引き出されるのかを説明し、林内をイメージさせたいので、現場の臨場感を持たせるように努めました。

「プロセッサは操作が複雑で難しいですが、女子は呑み込みが早いし、操作も丁寧で上手いですね」と加賀さん。暑いさなかの研修でしたが、「機械の運転席だと冷房も効いているので、作業が楽だと伝わったのでは」と、夏期の開催でむしろ良かったと感じています。

生徒たちが「楽しかった」と言ってくれるのが一番のやりがい

一方、チェーンソー操作は、5班に分かれて、チェーンソーの始動方法から玉切りまでの指導を行

いました。指導に当たった事務局の岩佐寿美さん（31歳）は、「最初に、チェーンソーだけがをしたらどうなるのかをしつかり伝え、装備を整えた上で、安全を徹底させました。その効果か、女子の中には、操作後にチェーンソーを置こうとしても、しつかり握り締めた手を開くことができないほど、緊張感を持つて取り組んだ子もいるほどでした。そんな素直さもあり、「チェーンソーの重さを使つて切つてと言うと、女子は素直にやつてくれる。男子は力まかせにやるので地面を切ることも多く



生徒たちにはチェーンソーの始動操作から玉切りまでを指導した

て」と、チェーンソー操作でも女子の上手さが際立っていました。

高校生への林業指導は、11年間続けてきた実績で、説明も上手くなり、段取りも連携も慣れたものです。メンバーの

中には門川高校の卒業生も多くいます。「学校の先輩の立場なので生徒たちにストレートに、服装や態度に対して注意もできます。社会に出たときに困らないで欲しいから」と、後輩への思いを語る岩佐さんです。

高校にとっても



女生徒は、素直に指導どおりにチェーンソーを操作し、丁寧な作業を行った

外部講師への期待は大きく、門川高校の俵準一先生は、「生徒たちには、林家の家庭の子はいませんので、実際に林業をされている方から直接学べる貴重な機会です。座学よりも実習の方が好きな生徒たちですので、楽しく学べることもありがたいです」と語ります。

さて、12年目の研修に向けて、課題としているのは、開催場所についてです。これまでは、高校の中庭を使ってきましたが、過去に1度、山の中の施業現場で研修を実施したことがあります。いずれまた、施業現場での研修もやりたいという思いもありますが、あくセスが良くて40人の生徒が安全に作業できる場所の確保が難しく、今のスタッフで対応するのは厳し



地域のお祭りでは、林研メンバーが製作した積み木が人気

「林業に就業してくれなくてもいいので、山で地道にこういう力仕事をやっている人がいることを知って欲しい」との思いから、11年前にスタートした林業体験研修ですが、今回の研修の後、2名の男子生徒から「山での仕事に興味

林業を志す若者たちは 確実に増えている

いのが現状です。むしろ、無理をしすぎない判断が、安全に、長く研修を継続できている1つの要因になっているようにも思われます。

「林業に就業してくれなくてもいいので、山で地道にこういう力仕事をやっている人がいることを知って欲しい」との思いから、11年前にスタートした林業体験研修ですが、今回の研修の後、2名の男子生徒から「山での仕事に興味

があるけれど、仕事はありますか」と、声を掛けられました。

この状況に加賀さんは、「最近、うちの集落でも22歳と23歳の子がUターンで帰ってきて、林業を継いだばかりです。町内の人でも、山で働きたいという人も多くて、そういう話をよく聞くようになりました。自分たちが林業研修を始めた当時は、若い人で林業をやりたいという人はいなかったけど」と感慨深げです。岩佐さんも「最近、林業に対する関心の高さを感じます。テレビの林業のドキュメンタリー番組や、『W

OOD JOB!』（林

業がテーマの映画）の影響もあるのかな。林研の林業研修も、継続してきたことが、徐々に伝わってきたのかも」と感じる人が多いかもしれません。

そんな、若者の林業回帰ともいえる状況を語る加賀会長自身も、Uターンで林業を継いだ1人です。20代半ばになって、それまでの



4 mの丸太を組んで作成した餅つきの檣。お祭りなどで活躍し、テレビ取材を受けるなど評判となった

メーカー勤務に対して、作業工程の一部だけを担当する仕事内容に達成感が得られず、父親の元に戻って、素材生産業に就いて10年目です。今振り返っても、あのか

の決断は「大正解だった」と即答できるほど。

「難しい木を伐倒したときは、俺ってなんて上手いんだろうって楽しいし、林研や消防団活動なんかで、地元仲間もいっぱいできたり」と、林業にやりがいを感じる日々です。

林研の会長としても、県内外の林研団体と交流を持つ中で、「おじいさんたちの林研グループが、ヒサカキを栽培して、その収入で林研の研修旅行に行ったりしていると聞いて、俺たちも先々あんなふうになれたらなと憧れた」と、

多くの刺激を受けています。今後の林研の活動展開についても、「材価が下がったときなどに、別の収入の道になるような素材生産以外の仕事の開拓を林研でできないだろうか」と考えているところだ。

一方、森林組合職員である岩佐さんは2年前に、1・6 haの皆伐地を購入して育林を始めました。「うちは林家ではないので、山を持つてなかったから、山仕事をやりたくて」との思いからです。そんな岩佐さんに対して、加賀さんは、「デートもしないで、休みの日には山で下刈りをしている。男の隠れ家みたいな、そんな楽しさがあるのかな」と、嬉しそうです。

林業を楽しみながら、やりがいを持つて取り組む若い林業者たち。その姿は、何にも増して、高校生たちに林業への関心を向けさせる呼び水になったに違いありません。

*まとめ 編集部

事

インターンシップ、森林・林業体験学習

例

地域に根づいた多彩な活動 「鳴子林業と「木」の合う仲間たち」



「鬼首（おにこうべ）山の子探検隊」自然散策

鳴子林業研究会連絡協議会「宮城県」

湯の町＝鳴子で
地域の森林・林業を活性化

私たちが活動している大崎市鳴

子温泉地区は、奥羽山脈の中央部、宮城県の北西部に位置しています。標高600～1300mの山々から形成される2つの大きなカルデ

ラと広大な大地から湧き出る豊富で多彩な源泉により「湯の町＝鳴子」として、全国的に有名な観光地となっています。鳴子温泉地域は栗駒国定公園に指定されており、森林が総面積の84%を占め、その65%が国有林です。また民有林9695haのうち、5684haが人工林となっていて、その割合は59%を占め、国有林等にはスギ林、ブナ林、キタゴヨウ林、ハルニレ林といった特色ある天然林が分布し、大変豊かな森林資源を構成しています。このような自然環境を背景に、鳴子温泉地区には「鳴子町林業研究会」、「鬼首（おにこうべ）林業クラブ」、「鬼首林友会」の3つの林研グループがあり個別に活動を展開していましたが、情報交換や地域活動を強化するため、鳴子林業研究会連絡協議会（以下、鳴子林研連）として昭和60年に統合。「地域との交流を大切にしな

盛んな林業体験・緑化活動を支援

主な活動は小学生への学習支援イベントの開催・参加、間伐の推進の3つが挙げられます。

小学生への学習支援では、小学生が行うさまざまな活動において、植林を始めとする各林業の現地指導などを行っています。これまで県の普及指導活動とタイアップした林研活動として、小学生が森林を通して学ぶ機会が多く設けられ、総合的な学習の時間を利用した林業体験活動や緑化活動が毎年盛んに行われています。



林研メンバーといっしょに植樹作業をする児童

また、地元公民館が主催している、自然を通して教育を図る「鬼首山の子探検隊」活動においても、毎年森林・林業に係るさまざまな行事が催され、鳴子林研連ではこれらの森林・林業に関する活動に企画から参加し、植林や各施業方法等の現地指導をしています。

小学校での総合的な学習時間を利用した活動においては、身近な木々である学校内の樹木を調べたり、植林から下刈り、枝打ちなどの各施業を取り上げたりしました。いずれも身をもって体験してもらうことを重視し、森を管理し守っていくことの大切さと併せて指導しています。それらの活動が評価され、鬼首小学校の活動は平成23年度全日本学校関係緑化コンクールに入選し国土緑化推進機構理事長賞を受賞、また、平成24年度第29回「道徳と特別活動の教育研究

賞」の学校（団体）の部で優秀賞を受賞しています。

「鬼首山の子探検隊」活動では、植林・枝打ち等の各施業体験に加え、植菌体験やメープルシロップの採取、木工教室、自然観察会、合板工場見学など、川上から川下まで幅広く林業

に係る体験学習を実施しています。この活動の一環として、東日本大震災の被災地支援活動をきっかけに、宮城県沿岸部の石巻市と鳴子温泉地域の小学生の交流イベント「海の子山の子交流事業」を各種団体と協力して企画・実施しました。植林や枝打ち体験のほか、自然散策や草木染めを行い、子供たちは鳴子温泉地域の豊かな自然に触れながら他校児童との交流を楽しんでいました。



鬼首小学校児童による植樹体験

高校生と森林保育事業 植付け、下刈り、 枝打ち体験

最近の活動では、平成27年度より宮城県小牛田（こごた）農林高等学校でインターンシップ事業を実施し、日本の森林に携わっている人材（生徒）をつくるためにも森林の保育事業を中心とした唐鍬を使った苗木の植付けや苗木のまわりの下草を刈る下刈り、または



苗木のまわりの下草を刈る生徒

成長した木々の枝を切る枝打ちを体験させ、森林保育の大切さや施業の仕方を教えながら体で体験してもらおう後継者育成に力をいれています。

加えて今年は高性能林業機械を学校林に入れて実演を披露し、多くの生徒たちの興味を引きました。今後もこのような事業活動をしな

がら、林業後継者育成に少しでも貢献できれば幸いと考えております。

地元の方々にも 森林・林業を知ってもらう

もっと地元の森林に目を向けてもらうため、毎年、林業ゆかりの品々の展示や木工体験教室等を行

い、地元の方々に

林業に親しんでもらうイベント「鳴

子林業まつり」を開催しています。

普段は豊かな森林に囲まれて暮らしている地域の方々に、改めて林業と

触れあい考える機会として関心が寄せられ、多くの

方々で賑わっています。

また、地域のイ

ベントにも参加し、チェーンソーア

トの実演や、木工教室や展示ブース

を設置し地元林業



海の子と山の子が集合

をPRしています。

パネラーとしてシンポジウム等

にも参加し林業事業者の意見を発信。大崎市で開催された「2011

年国際森林年記念行事」においては、川上代表のパネラーとして、

川中・川下の事業者や林野庁長官と地元の森の恵みをどう活かすか

意見を交わしました。

児童生徒の森林環境教育を通じて後継者育成の他、新たな森林施

策を会員間で共有

するため、平成24年度の森林法改正

による森林経営計画制度の導入に際

しては、県及び市の担当者を招いて

地域の森林所有者の方々とともに勉強会を開きました。

新制度についてはさまざまな方法で広く知らされて

いましたが、個々の森林所有者がそ

れを自力で理解することは容易では

なく、またその理解がないままでは

有効に制度を活用できず地元林業の衰退に繋がりがかねません。その

ような事態を回避すべく、一念発起し各方面に働きかけ、勉強会の

開催が実現しました。

間伐、間伐材利用の推進

このように地元の方々に森林・林業の重要性を呼びかける一方で、森林・林業の活性化に努めて

います。中でも健全な森林育成に欠かせない間伐の推進に力を注いでおり、地元森林の集約化に向けた積極的な働きかけ、間伐材利用によるPRや木質バイオマス事業への参加など、さまざまな角度からアプローチを図っています。県及び市の協力を得ながら、地元森林所有者を交えた集約化施設を検討する打ち合わせ会等を開催し、併せて、鳴子温泉駅前（しとまえ）地区に設置した間伐モデル林の見学会や間伐講習会も実施しました。

最初に素材生産が可能な40年生以上の林分のうち共有林を中心に働きかけ、次に周囲の所有者に対し働きかけた結果、約30名の所有者による概ね70haの林地を集約化することができました。間伐を推進するには、商品となる木を使っ



さまざまなイベントが開催された

鳴子林業の伝統を守りつつ、新しい林業経営を模索

メンバーの研鑽を重ねるため、毎年、間伐等の活動において先進的事例を持つ地域を訪ね勉強しています。福島県の磐城森林管理署では間伐展示林とそこから伐採された完満通直な材を見学し、茨城県久慈郡大子町（だいごまち）ではつくば市と提携してカーボンオフセットに取り組んでいる環境連帯事業について担当者と話をし、地元の林業研究グループとも交流しました。これらの学んだことを基に何ができるか、地域に即した形で還元していきたいと思っています。

大崎市では「バイオマスタウン構想」を掲げ、構想実現に向け現在協議が進められています。構想には鳴子温泉地域の豊富な森林資源による木質バイオマスも重要な資源として位置付けられており、林業活性化に向けまたとないチャンスが到来しています。鳴子林研連としても積極的にこの構想実現に参加すべく、現在、各方面と調整を進めているところです。

また、平成26年には業界内外の木質バイオマスへの理解を深めるため、鳴子林研連と大崎森林組合青年部鳴子支部とが共催している「21世紀の林業を考える勉強会」において木質バイオマスを取り上げました。木質バイオマス導入における成功ポイント等について、川上から川下まで各方面からの参加者とともに学び、今後に活かせる多くの情報を得ることができました。持続的に森林資源を循環利用していく林業、観光と不随の関係にあるけしや民芸品といった伝統工芸を支える林業は、鳴子温泉地域にとって大変重要な産業です。

古くから長伐期大径材生産林業地としての伝統と存続、そして新しい林業経営を模索していかねればなりません。これからも新しい情報、施策、技術などに率先して取り組み、導入、実践することで「木の合う仲間」とともに地域への啓発を図っていききたいと思います。

＊まとめ

鳴子林業研究会連絡協議会事務局
遊佐 学

事

インターンシップ、森林・林業体験学習

例

森林公園で 高校生の植樹体験



コナラ・クヌギを植樹する高校生。
男女ともに一生懸命

河北郡林業研究会「石川県」

「夢があり、楽しみがあり、
遊び心がある」が
モットー

河北郡林業研究会（神崎隆洋会
長、以下、研究会）は昭和41年に
設立され、能登半島の付け根に位
置する河北郡でさまざまな活動を

展開しています。現在の会員数は
22名、30代から70代までの幅広い
年齢構成で、森林所有者や森林組
合職員のほか、多様な職業の人々
が参加しています。

結成当初はシイタケ栽培技術の
向上が目的でしたが、時代の流れ
をキャッチしながら、森林整備、
啓発活動を行っています。これま
でも、平成16年の23号台風被害
がきっかけとなって、混交林づく
りや森の健康診断を実践してきま
した。河北郡は、県の優良品種で
ある河合谷杉（かわいだにすぎ）



慣れないスコップで必死に作業

の産地であり、スギが多く植えら
れるとともに、アテの造林も盛ん
です。3年前からは、侵入竹の伐
採除去活動を実施するほか、地元
のお祭りなどに毎年参加していま
す。

河北郡の中心にある津幡町（つ
ばたまち）には、総面積1150
haの石川県森林公園があり、例年
そこで地元の石川県立津幡高等学
校（以下、津幡高校）と林業体験
を行っています。

10年間続く 高校生の林業体験 クヌギ・コナラの植樹

6月7日に津幡高校の1年生が
森林公園に集まっ
て、研究会による
林業体験が実施さ
れました。

この取り組みは、
体験内容を変えな
がら、10年ほど続
いています。今年
は、森林公園でコ
ナラとクヌギの植
樹となりました。
このほかにも、シ

イタケの植菌体験を毎年行ったり、女子高生限定で椿油の搾油を試験的に行ったりもしています。

当日は、100名を超す高校生が、研究会のメンバーが地帯えをして準備しておいた現地に集合しました。メンバーは、参加した高校生にまず森林の機能や林業の現状を説明して、「伐ったら植える」というメンバーにとっては当たり



高校生らに森林の大切さを説明する河北郡林研メンバー

前のことが、環境を守るために必要であることを伝えました。なぜやるのかを頭の中で整理してもらった後に、スコップと苗木を高校生へ配布して、各自1本以上の苗木を植樹しました。

以前の別の体験会では、苗木を地面に置くだけだったり、ノコギリの背の部分で切ろうとしたりと、たまに常識外れの行動をとる高校



「自分が植えた苗木が本当に育つのかな。また見に来たい」と興味をもつ高校生も

生もいることから、ケガがなく体験会が終われるように、メンバー4〜5名が指導しながらの作業となりました。

天気の良い野外での植樹が終わり、慣れない作業で疲れた顔をしながらも、「自分が植えた苗木が本当に育つのかな。また見に来たい」と興味をもつ高校生が印象的でした。

**幼稚園や
小学校でもクラフト制作や
タケノコ採り**

高校のほかに、幼稚園や小学校向けのイベントも継続して行っていて、こちらの方では遊びの要素を高くして楽しむ会になるように工夫しています。

津幡町の太白台（おもしろだい）小学校は、昭和55年から個人所有の山林を学校林として借り受けていて、いしかわ版里山づくりISO（企業、団体、学校、NPOなど）による里山里海の利用保全活動の取り組みを県が認証するもの）にも認定されています。

自然体験会では、学校林で採集してきた葉っぱや木の実などを使つてのクラフト制作やタケノコ採りが人気です。子どもの豊かな発想は、教室よりも自然の中でのびと生かされるのがよくわかります。

このほかにも、地元の金沢森林組合の協力の下、林業機械の試乗や間伐体験を実施したこともあります。木を伐るのは良くないことという漠然としたイメージを持つ



小学校の学校林での葉っぱや木の実の採集。
あいにくの雨でも熱心に先生の話聞く児童たち



幼稚園からの流しそうめんの感謝状



持ち帰った葉っぱや木の実を組み合わせてのクラフト製作。
児童らの発想は豊か

平成25年度からは、
森林・山村多面的機能
発揮対策交付金を活用

合を通じて地主の方に
承諾をとり、隣地との
境界確認・除伐・再造
林を行いました。台風
被害の経験から、「災
害に強い森林をつくる
ためにどうすれば良い
か」を話し合った研究
会では、広葉樹の苗木
の植栽にチャレンジし
ています。

ている小学生に、人が
植えた人工林は人が管
理するために伐ること
も必要であることを伝
えます。後日、先生か
らいただいた子供たち
の感想文には、山は40
年以上かけて育ててい
くものという長い時間
軸に驚くとともに理解
してもらえた様子が書
かれてありました。イ
ベント主催者として嬉
しい限りです。

侵入竹の伐採で 地域に貢献

こうした学校と連携した体験会
は、「初期に熱心な先生がキーパ
ーソンとして積極的に参加しても
らうことが大切で、体験会が続い
ている学校は、いずれも校長先生
の応援があったから」と事務局の
潟端良子さんは話します。

研究会では、地域の森林整備に
も積極的に取り組んでいます。
平成16年10月に九州から関東ま
で広い範囲で被害をもたらした台

風23号は、胸高直径40cm以上の木
の幹が途中で折れるなど、河北郡
にも大きな爪痕を残しました。台
風一過、被害状況を把握して、特
に被害の大きかった森林や国道端
から見える森林などから優先して
復旧にあたりました。平成22年
は、当時の「吸収源対策森林施業
推進活動支援事業」を活用して、
小学校の通学路にある放置林を除
伐しました。枯損木の間に雑木や
草が茂り、全体がグズのツルに覆
われて見通しのきかない場所
で、小学校の心配の種となっていま
した。ここでは、森林組



民家そばでの侵入竹の伐採。伐り倒した竹は引き出してから細かく刻む



作業終了後に記念撮影。一仕事終わって爽やかな表情のメンバーら

間伐材を使ったゲームや木工教室にたくさんの親子が参加します。研究会は、その祭典や農林漁業まつりなどの常連で、メンバーが栽培したきのこや野菜を使ったヘルシーなもりもり焼き（お好み焼き）や焼きそばを販売しています。メンバーの多くは、平日仕事

して、住宅地の裏山などに繁茂した侵入竹を伐採・除去する活動を行っています。チェーンソーなどの手持ち機械を使って侵入竹を伐り、周囲の竹と絡まって倒れない竹を引っ張り出す重労働です。今年からはチェーンソーで駆動するポータブルウィンチを導入したので、少し作業が楽になりました。伐って集めた竹は、今は焼却していますが、他のイベントで竹チップ

プを敷き詰めて好評だったことから、チップパー機のレンタルも検討中です。

研究会の長年の実績も手伝って、地元の区長が呼びかければ地元住民からの竹伐採の依頼は引きも切らず、メンバーだけでは手が足りないくらいです。申請に必要な書類が整理できた後は、メンバー総出での作業となります。

この交付金事業では3年間の活

動計画を立てることとなっており、ちょうど今年度から第2期に入りました。地域住民からの研究会への期待は高まるばかり、竹林整備はしばらくの間は研究会の主要事業になりそうです。

特産品を活かした出展

森林公園では毎年みどりの日に県民みどりの祭典が開催され、緑や自然に親しむためのさまざまなイベントとして



毎年みどりの日に開催される県民みどりの祭典で

をしている現役世代ですが、「休みの日にイベントでお客さんと一緒に楽しんでもりもり焼きを作って、終わったあとには焼き肉で反省会をするからみんな続けていける」と渦端さんは言います。

*まとめ 編集部

事

インターンシップ、森林・林業体験学習

例

高校生、林業に目覚めた 森林・林業体験実習



玉切りをする生徒

愛知県指導林家連絡協議会「愛知県」

長年にわたる後継者育成

愛知県指導林家連絡協議会では、活動目的の1つとして林業後継者

育成を掲げ、昭和56年の設立当初から高校生への林業体験実習を中心とし、小・中学生へも林業体験学習を実施してきました。



斎藤憲生さんのところでは13名の中学生が実習を受けた。
ロープを使って丸太を運んでいるところ

林業関連学科がある県立の3高校に希望者を募り、生徒は学校の休日や夏休み、冬休みを利用して参加します。実施形態は、受け入れ林家により日帰り学習や宿泊学

各指導林家、生徒の実習を 意欲的に受け入れる

習などそれぞれで、実施内容も各林家の状況で造林、間伐、造材など林業経営に関わることやキノコ栽培など幅広いものになっています。今年では合計50数名の児童・生徒に林業体験実習を実施しました。

4軒の指導林家の受け入れ内容を紹介します。

岡崎市の荻野定雄さんは、7月25日に愛知県立安城農林高等学校（以下、安城農林高校）森林環境科の生徒2名を受け入れ、間伐実習をしました。

新城市の斎藤憲生さんは、7月1日に同市立作手中学校の1年生13名を受け入れ、間伐と搬出をしました。シイタケ菌床栽培をしている豊田



鈴木実さんのハウスで菌床シイタケ栽培の実習を受ける生徒

市の鈴木実さんは、7月21日に愛知県立田口高等学校（以下、田口高校）林業科の2年生男子を、8月10日には安城農林高校森林環境科2年生男子を、各1名ずつ受け入れ、菌床の並べ替えや収穫など、つきつきりで栽培の指導をしました。

また、新城市の西郷光男さんのところで実習を受けた生徒は映画「WOOD JOB!」を観て「山で生きよう」と決意し田口高校に進学したのだそうで、熱心に実習

を受ける姿に感心した西郷さんは、生徒が皮をむいた絞丸太と磨き丸太計5本を高校に寄贈しました。

3名の女子生徒、 1泊2日の実習を受ける

指導林家の1人、東栄町の原正信さんが1泊2日で田口高校林業科1年の女子生徒3名を受け入れた様子を取材しました。

8月8日は座学からスタートし、次いで外で安全講習とチェーンソーの取り扱い。エンジンが掛かるようになると丸太の輪

切り、それができると丸太を立てて受け口を入れる練習です。チェーンソーで線を入れてその通りに切るのですが、角度が定まらず線の通りにはいきません。生徒たちは何度もやり直していました。

実習で林業の道に進んだ女性

原さんはこれまで23年間途切れることなく毎年2〜3名ずつの実



丸太を立てて受け口を入れる練習

習生を受け入れて来ました。その中に、2年前に受け入れた安城農林高校森林環境科の桑原明香里さんという女子生徒がいます。

実習初日にチェーンソーのエンジンを掛けたとき、桑原さんは「自分には無理だ」と思ったのですが、翌日、原さんに指導してもらって

立木を伐倒したとき「私にもできる」と思えたそうです。それから自主的に原さん宅を何度も訪れ、林業を仕事にしようと決意し、卒業と同時に水窪町森林組合に就職しました。現在は作業班で現場作業に従事し、職場の人たちに支えられながら頑張っています。

今回は原さん宅に女子生徒が実習に来るというので、日曜日に駆けつけてくれました。

女子の先輩がいてくれたので、生徒らは和やかな雰囲気を実習に入り、チェーンソーの扱いは手を添えて指導してもらいました。また桑原さんは、原さんの妻のさき子さんに娘のように馴染んでおり、女子生徒らも夕飯の支度を一緒に手伝うなど、宿泊も打ち解けたものになりました。

初めての伐倒だから 大きな木を

8月9日は間伐で伐倒をしました。原さんが若いころ植えた40年生のスギは樹高約20m、直径40cmほどに成長しています

緊張する生徒。原さんがチェーンソーで線を入れて受け口を示します。そして、傍らで見守りながら、少しでも歪むと制止し、伐倒方向と合っているか生徒の目で確認させ、時間をかけ確実な受け口を入れました。追い口も同じように、正しい高さで水平に切れているか、両方のツルが同じように残っているか、何度も何度も制止し目視で確



追い口を入れる生徒。
何度も制止し切り口を確認した



原さんの指導を受けて立木に受け口を入れる生徒。
緊張感が伝わってくる

認させながらチェーンソーを入れ、最後にクサビを打ち込みました。
大きな孤を描きながら地響きをたてて倒れる木。その瞬間、生徒は感動と安堵が合わさったような表情になります。原さんはそんな顔を長年見つめ続けてきました。
我に返った生徒は頭上を見上げ「明るい！」と林内に差し込む光に気づき、間伐の大切さを自分の感覚で学びます。「ここは本当はもっと間伐を進めんといかんだに（いけないけど）、このサイズの木がいいと思って実習用に残してあるんだわ」と原さん。

山ビルにもビビらない

お昼の休憩で靴を脱いで家に上がった1名の生徒。彼女の歩いた跡に点々と血痕が！山ビルでした。「ヒルは満腹になつて先にどつかで落ちたから見なんて済んだ。血を吸って大きく膨らんだヒルみたらショックだに」。東栄町でもここ10年ほどで山ビルが増えました。心配されましたが、女子生徒は落ち着いて傷口の処置を済ませ、森林に入るのが嫌になることはありませんでした。



伐倒木の玉切りをする生徒

午後は使用したチェーンソーの点検と整備をきちんと行い、2日間の暑い夏の実習を終了しました
実習終了後、生徒が寄せた感想には「山仕事は軽い気持ちでやってはいけないと思った」「技術もだが仲間との信頼関係も大

切」「チェーンソー実習をもっとやりたい」という声とともに、築150年の家で原家の暮らしを体験できたことへの感謝の言葉が添えられていました。

生徒の声に耳を傾ける

原さんが森林体験実習で目指していることは生徒に「身体で覚える体験」をしてほしいということ。今まで受け入れた中には桑原さんを始め、山仕事に目覚めた生徒が事業体や森林組合、製材業に就職しています。

生徒の意欲をかき立てる体験実習を行う原さんは、大きな木を伐



最後に使った道具の点検と整備を行う。2日間の実習の思い出話に花が咲いた

ることが生徒の心をとらえるのだと考えています。「生徒は迫力や手応えを感じるから、それがキッカケになるんじゃないかな」。物静かな原さんは自分の考えを押し付けることなく、生徒の話に耳を傾けます。実習が終わってから自主的にやって来る生徒が何名もいます。

食事など生徒のお世話をするさき

子さんは「遊びやオシャレに興味のある年代の子がこんな山奥に来てくれて」と感心します。過疎化で悩む地域ながら原家の居間は賑やか。

指導林家から直接受ける少人数での森林・林業体験実習。生徒にとって森林・林業を見つめる生きた学びになっています。

事

インターンシップ、森林・林業体験学習

例

小学生から高校生まで 町をあげて森林・林業教育に取り組む



上浮穴高校インターンシップ。
「育林技術」を学ぶ生徒たち

愛媛県林業研究グループ連絡協議会

〔愛媛県〕

2本立ての 林業就業者促進の活動

愛媛県林業研究グループ連絡協議会（以下、県林研）は、発足した昭和37年から54年目を迎え、会

員数は655名（平成28年8月1日現在）、所属する林業研究グループは、62団体を数えます。

県林研では、持続可能な林業経営や林業振興のため、将来の林業を担う人材育成が喫緊の課題と考えており、所属する林業研究グループが中心となって県下の4地域で林業教室、2地域でインターンシップ（林業就業体験）を実施しています。

林業教室は、主に小・中学生やその保護者を対象としており、木工作品づくりやシイタケ等キノコ栽培などの体験を通じて林業について理解の醸成を図ります。

また、インターンシップは、農林専門学科を学ぶ高校生を対象として県下2地域において実施し、林業関係への就業促進を図っています。なかでも、小学生から高校生までの一貫した森林・林業教育により、林業就業者の獲得を目指

す地域もあり、次代を担う人材育成に効果を上げています。

林業地・上浮穴地域 上浮穴林研の取り組み

県林研に所属する林業研究グループのなかで上浮穴（かみうけな）林業研究グループ連絡協議会（以下、上浮穴林研）が活動している上浮穴地域は、年間23万m³を超える素材生産量を有し、本県の素材生産量の約40%以上を占める、西日本においても有数の林業地です。同地域では山間部の谷間地形に隔てられた地理条件から、小学校が9校、中学校が2校点在しています。上浮穴林研では、全校生徒が極端に少ない小・中学校など校区毎の実情に対応するため、事前に教育委員会や担任教師と計画の打ち合わせをすることで、きめ細やかな林業教室の実施に努めています。

また、同地域には森林・林業の専門学科のある愛媛県立上浮穴高等学校があり、地元高校から即戦力となる林業就労者獲得を目標として、小学生から高校生まで一貫した森林・林業教育を町内林業関係団体や企業と連携協力して町ぐるみで取り組んでいます。

小学生には 「木とのふれあいから 始まる林業教室」を

小学生には、木とのふれあいを大切に考え、林業に用いる道具や機械の操作実演や収穫も楽しめるキノコ栽培、地域材の香りを大切にした木工作品づくりを実施しています。

キノコ栽培は、植菌用ドリルでクヌギやコナラの原木に植え穴を空け、シイタケ菌の植菌作業を体験するほか、チェーンソーでエノキの原木を約15cm幅で切断し、ヒラタケ菌とオガ屑、米ぬかの混合した菌をサンドイッチ状に植菌する作業を体験しました。木工作品づくりについては、ノコギリと金槌を使用して本棚や小物入れなどを製作しました。



自分で栽培したキノコのおいしさも知った林業教室「キノコ栽培体験」



林業教室「木工作品づくり」(小学生)で地域材とふれあう

山間部の小学校とはいえ、シイタケ植菌用のドリルやチェーンソーを初めて使用する児童も多く、上浮穴林研の会員が児童1人1人にマンツーマンで使い方について指導することで怪我のないように万全の注意を払っています。

また、上浮穴林研の会員と児童とは、祖父と孫ほど歳の差があり、同じ地域で生活しながらも日頃は交流が始まらず、道具の使い方の指導を通じて大切な交流の場となっています。

林業教室を体験した児童からは、感謝状と共に「自分で栽培収穫したキノコがおいしかった」、「ヒノキ材の香りが良かった」などの感想文が届けられ、木とのふれあいを通じて林業の面白さや楽しさを肌で感じてもらったことに満足しています。

中学生には 「林業について 理解を深める林業教室」を

中学生には、地元篤林家の山林

や森林組合の市場、木材加工施設、さらに地域材を使ったモデル住宅の見学を通じて、山林の原木が製材品となって実際に住宅用木材として使用されるまでの林業の流れを学習しています。

上浮穴林研の中でも育林に熱心に取り組んできた会員の山林において、会員自らが植栽から今までの施業履歴や間伐時の収入などの概要を説明しました。その後、上浮穴地域の林業や製材業について、森林組合の原木市場や製材工場に

において、組合の担当者から年間の取扱量や加工量等について説明を聞いた後、製材工場の製品が実際に使用されたモデル住宅で木の良

元を見直した」、「木が見える家がいい」などの声が聞かれ、これらの高校進学や将来の職業など進路を選択する重要な時期に林業について良いイメージを持ってもらえたいと思っています。

これらの林業教室に使用する資材や現場見学は、上浮穴林研が依頼した町内の林業関係団体や企業が準備を行い、場合によっては林業教室にも参加するなど全町をあげての取り組みとなっています。

高校生には「担い手育成への総仕上げとなるインターシップ」を



林業教室「原木市場見学」(中学生)で地元材を間近に見る生徒たち

さを体感しました。

見学を通じて生徒からは、「手入れされた山林はきれい」、「県内の原木の大部分を生産している地

愛媛県立上浮穴高校は、昭和28年に林業科が設置され、平成14年に学科改編により現在の森林環境科と名称が変更となりましたが、県内で唯一の森林・林業に関する専門学科のある高校で、愛



林業教室「製材工場見学」(中学生)。
製材年間取扱量、加工量等の説明を熱心に聞く



林業教室「モデル住宅見学」(中学生)。
製材工場の製品が実際に使用された住宅で木の良さを知る

媛県の林業振興にとって欠かせない人材育成や実践教育の重要な機関となっています。

上浮穴林研では、地元高校の地の利と小学校からの林業体験学習の総仕上げということで、インターシップにより、育林から、伐採、製材加工、住宅に至るまでの一連の流れを体験してもらい、将来の地域林業を担う人材育成と即戦力獲得を目指しています。

インターシップの内容は、森林・林業に関する講義を通して地元の基幹産業となっている林業の位置付けや業務の内容を理解してもらい、またチェーンソーを使った学校林の間伐作業の実習、林業事業体での高性能林業機械の操作実習など現場作業を体験するとともに、木材加工施設の見学や地元自治体が独自に開発した耐力壁を活用した



インターンシップ「学校林間伐体験」(高校生)

モデル住宅の見学など、製材加工や建築分野での木材利用について学んでもらいます。

そして最後に、地元の林業関係者と意見交換の時間を設け、同高校卒業生の大先輩にあたる上浮穴林研の会員や林業事業体で機械オペレーターや森林施業プランナーとして活躍している年齢の近い先輩などが一同に会して、就労の動機、仕事の内容(現場作業や事務など)、将来の抱負などについて

自由に話し合うことで就業意欲を高めてもらいます。

この意見交換の時間は生徒からの反応も良く、学校林の間伐作業体験から感じたのか「仕事の現場はしんどいのか?」、「給料は良いのか?」などの率直な質問が先輩に向けられ、「他の仕事に比べ労働負荷は大きい、出来高に比例して収入が得られ、作業の熟練や工程の工夫など努力した結果が目に見えることが面白い」との先輩



インターンシップ「先輩との交流」(高校生)。
活発な意見交換が行われた

ターンシップの活動を通じて、将来社会人として自立したときに、県産材はどのように育成され、どのように生産・製造されるのか良き理解者になってももらいたいと願っています。

林業教室やインターンシップの経験者には、将来にわたって林業の自主的な学習を期待しており、県産材ひいては国産材の良さを周囲の友人や家族に向けて情報発信することを望んでいます。

の答えに興味深い様子で聞き入っていました。

インターンシップ後のアンケートにおいても、何らかの形で林業関係の仕事に携わりたいと回答した生徒が全体の75%程度を占めており、さらに同校から林業関係へ就業する生徒が毎年3名程度いることから次代を担う人材育成に効果を上げていると実感しています。

最終的には県産材の良き理解者を育てたい

県林研では、林業教室やイン

＊まとめ

県林研事務局

愛媛県林業研究センター

連携推進室 担当係長 中岡圭一

事

森林・林業体験学習

例

小学生の学校林手入れ体験 中学生の森林整備・シイタケ栽培体験



ヒノキの皮をむく児童たち

松阪林業研究会「三重県」

人間の暮らしを支えてきた山

松阪市の松阪林業研究会（以下、

松阪林研）は、昭和51年に発足し、40年の歴史があります。設立当初はスギ・ヒノキ優良材生産を目的に、育苗や育林技術の研修を行い、

50名もの会員が切磋琢磨していました。その背景には、松阪が優良材生産だけでなく、古くから県を代表する木材集積地として、松坂木材コンビナートを擁する流通・加工の拠点だったことがあります。しかし木材需要の低迷とともに、松阪林研でもメンバーの減少と高齢化が進み、現在は9名で平均年齢は70代になっています。65年間林業を生業にしてきた松田和生会長も林業の盛衰を味わってきましたが、前を向いて次のように話します。「子供らに林業を受け継いでほしいとか、そこまで願っているのではないんです。ただ、山は人間の暮らしになくてはならんもんやゆうことを知って、大人になっても大切さを覚えとってほしいなと思ってるだけです」。その言葉の通り、松阪林研では地域の小・中学生に授業で林業体験活動を十数年間続けています。

おかわち
大河内小学校の学校林で
体験学習

松阪市谷津町にある松阪市立大河内小学校が所有する学校林は面積が約2000㎡あり、60〜80年生の立派なスギやヒノキが植えられています。昭和初期、将来の校舎の建て替えのために民有林が提供され、当時の大河内村民らが植林を行い、昭和24年に旧村に寄付され正式に学校林となりました。山奥にある学校林は車で約20分、そして堀坂登山道からは約1・5kmほど歩いた所にあります。松阪林研では毎回、学校林での林業体験に先だって2人のメンバ―が現場を下見し、選木した木にテープを巻いたり、林道の草刈りやトイレ作りを行います。トイレは地面にスコップで穴を掘ったところに縦に割った丸太を渡し、そして立木を利用しブルー

シートで囲むと出来上がり。「男子はまだしも、トイレがないと女子はかわいそうやからなあ」。道の安全確認など念入りに行うと丸1日かかる作業ですが、毎年整備しているおかげで明るく安全な道が維持されています。

学校林の歴史と 森林について学ぼう

9月2日、学校林に入る前に1時間事前学習を行いました。

6年生の教室に向いた松田会長は「みんなのひい祖父さんが植えてくれた木です」と学校林の歴史から話し始め、木材を生産する以外にも「水やら空気やら作ってくれて、山は人間が生きるための原点でもあります」と森林の大切さを説明します。林業一筋に生きてきた松田会長の話は児童の心に響き、普段あまり集中しない子が熱心に聞き入る姿を見せ、担任の先生が感心していました。

次いで、準備してきたヒノキやアスナロ、スギなどの枝を児童に実際に手に取らせ、木の名前当てをし、それから葉書の語源とと言われるタラヨウの葉につまようじで



準備してきた枝を児童に回して木の名前を当てる

字を書きました。松田会長は「字が浮かび上がってきたときの子どものビックリする顔がとってもいいわ」と目を細めていました。

ヒノキの枝払い、皮むき 森林体験で得た学びを発表

9月9日、6年生12名と学校林での体験学習を実施しました。

学校林まで、児童らはバスを降りてから約40分の道のりを歩きました。到着すると、まずは伐採の見学からスタート。直径20cmのヒ



林道を歩く児童ら。学校林までもう少しだ

ノキが大きな音を立てて倒れたときは歓声が上がりました。次にそのヒノキの枝払いや皮むき作業をし、ツルツルとむける皮を持ち上げて楽しんだり、「これでオレも一皮むけた」と冗談を言い合ったりと、学校林に児童たちの元気な声が響き渡っていました。

伐採した木を輪切りにして板をとり校庭の

樹木板を作製したり、むいたヒノキの皮で染物をしたりと、体験学習は後の授業にも生かされます。今年、伊勢志摩サミットが開催された三重県では、それを機に県内の小・中学生が学習成果を発表する「子どもふるさとサミット」があり、同小学校の児童らが代表で森林体験と授業の様子を発表しました。

シイタケ栽培体験 駒打ちから収穫まで

松阪林研はここ十数年間、毎年

1月に4年生にシイタケ栽培体験学習を実施してきました。駒を打ってから収穫できるまで約2年かかるので、6年生になった秋の文化祭のときに食べられるように、この学年でやるようになりました。事前にメンバーがナラ原木を用意し穴を開けておき、当日3人1組になった児童が協力してトントんと種駒を打ちこみます。約30本、

班ごとに校庭の隅にリヤカーで運び、仮伏せするとちょうど2時間の授業が終了。児童らは「原木は重くて栽培は大変な作業だ」、「シイタケは嫌いだけど、今度から食べてみる」と感想を寄せてくれました。

中学生の職業体験学習 「わくわくわーく」を受け入れる

松阪市立中部中学校では中学生の就業体験学習「わくわくわーく」を実施しています。松阪林研でも十数年間受け入れを続けており、今年度は6月7日から4日間、9名の中学生が参加しました。

6月7日

初日は全員で松田会長の所有林で林内を見渡しながら、人工林と天然林の違いや森林の役割など解説を受け、整備の大切さについて学びます。さらに間伐の選木方法も教わりました。

6月8日

木の性質や伐倒の方法を解説し、実際の伐倒を見学しました。生徒

たちは感動した様子でしたが、中でも一番集中していたのが9名中ただ1人の女子。彼女は「将来は

木に関する仕事をしたい」と夢を持っていくそうです。

その後、皮むきをしましたが、

刃物の扱いを事前に注意したにもかかわらず、ナタを立木に当てて傷つけた生徒がおり、松田会長は「木にとってはお前の身体を傷つけているのと同じやぞ」と叱りました。「いじめとか、最近の中学生はいろいろな言われて

ることもあるけど、森林の中ではみんな同じ」。松田会長はやんちゃな生徒も優等生も区別せず接します。その毅然とした態度に生徒は素直に謝りました。

6月9日

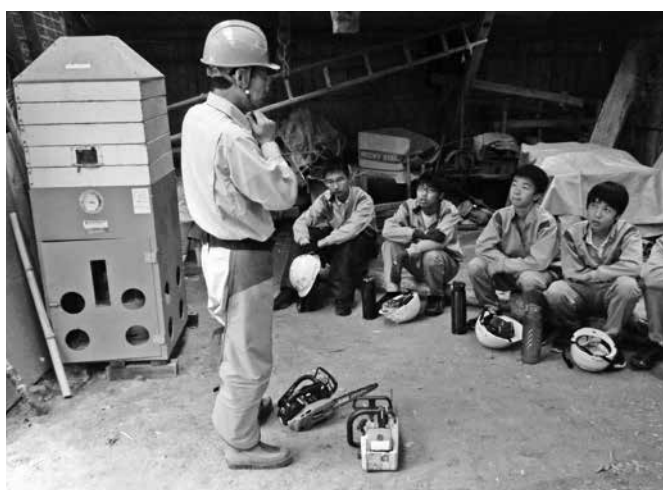
あいにくの雨。梅雨時期なので雨天を想定し、作業小屋で行う実習を組み入れています。チェーンソーの仕組みや取り扱いについて講習をし、丸太の玉切りを行いました。



選木にテープを巻く生徒



林内に集合して森林の解説を聞く生徒



防護服やチェーンソー取り扱いについて話すメンバーの川井逸夫さん。職業訓練校の元教員なので安全意識が高い



玉切りの指導を受ける生徒

6月10日
シイタケを出荷しているメン
バーのハウスで、ホダ木の移動と
収穫をしました。なかなかの重労働に「シイタケを作ってる人の大変さを初めて知った」と声がもれ、
収穫したシイタケを炭火であぶって試食させてもらうと、「美味しさも初めて知った」と声が上がりました。



収穫したてのシイタケを炭火であぶって試食。
「美味しい」と声が上がった



ほだ木の並べ替えを教わる生徒。ナラは思ったより重い

＊まとめ 編集部

歳の松田会長を筆頭にメンバーの高齢化が悩みでもあります。「みな（高齢で）活動が負担になっていることは確かや。だけど、松阪林研がなくなったら学校の受け皿がなくなってしまうから、来年もできるとこまで頑張るしかないと思ってるんです」。背筋をピンと伸ばして語る松田会長の表情は、はつらつとしていました。

長い年月、小・中学校の森林体験学習を行ってきた松阪林研は、子供たちの成長を見るたびやりがいを感じてきました。しかし、83

**受け皿を
絶やさないために**

4日間の体験を終えた生徒は、「山仕事为天候に左右されることを知った」「人間と自然が一体となる仕事だ」と感想文に学んだことを書いていました。

事

森林・林業体験学習

例

発足55年余。ベテランメンバーが伝える 小・中学生の森林・林業体験学習



育樹活動で枝打ちノコギリを使った
ヒノキ枝打ち作業を体験

天草林業研究グループ連絡協議会

「熊本県」

海に囲まれた天草
熊本の林研グループ発祥の地

天草は熊本県の南西部に位置し、
周囲を有明海、八代海、東シナ海
という3つの海に囲まれた大小

がいたそうです。

その後、林研グループの数とメンバー数は減少し、平成24年度には地域内にあった3つの林研グループを統合し、「天草林業研究グループ（以下、天草林研）」として再出発することになりました。平成28年4月現在、男性24名、女性10名の計34名で活動しています。多くのメンバーが若いころからずっと林研活動に携わっており、気

120余りの島々からなる地域です。青く美しい海に浮かぶ島では、深い緑の山々が織りなす絶景やトレッキングなどが楽しめ、海では海水浴やダイビング、1年中季節を問わず楽しめるイルカウォッチングなど、温暖な気候と豊かな自然の恵みを受けています。また、かつて渡来した南蛮文化やキリシタンの歴史を伝える施設が数多く見られる地域でもあります。九州本土とは「天草五橋」と呼ばれる5つの橋で結ばれていて、平成28年はその五橋開通50周年という節目の年でもありました。

天草地域の林研グループの歴史は古く、昭和26年、熊本県で初となる林研グループが天草地域で誕生したのが始まりです。その後、県内各地でも林研グループの活動が活発となりました。最盛期の昭和44年には天草地域内だけで18の林研グループ265名のメンバー



平成20～21年に設置した間伐展示林

がつけば大半が65歳以上という、年齢層がちよつと高めの経験豊かなグループです。

親子でシイタケ駒打ち体験と木製おもちゃ作り

天草林研の取り組みについて紹介します。天草林研が1つに統合される以前は、アラゲキクラゲの生産や、森林吸収源対策として間伐展示林の設置等に取り組んでいました。しかし、当時中心となっていたアラゲキクラゲを生産していた単位林研グループが解散したこと、またメンバー数の減少や高齢化などから、これまでの経験を生かす次の世代を育成することを目的に、小・中学生を対象とした活動へと変化してきています。

例えば、近年実施した「親子森林教室」では、メンバーの地元小学校の児童とその保護者呼びかけ、林研メンバーがシイタケ駒打ち体験や木製のおもちゃ作りを指導し、子供たちに楽しんでもらいました。タネ駒を打ち込む原木は、林研会員が所有するクヌギ林から伐り出し用意しました。当日、林研メンバーがドリルで開けた穴に、



焼き立てシイタケのおいしさにびっくり！



シイタケのタネ駒打ち。
お父さん、お母さんと一緒にとんとん打ち込む子供たち

子供たちがお父さん、お母さんと一緒に、金槌を使って駒をとんとん打ち込んでいきました。終わった後、林研の女性メンバーが準備したお昼ご飯をみんなで食べましたが、その時にシイタケの炭火焼きも出しました。最初は「シイタケは好かん」

「食べきらくん」と言っていた子供たちも、焼き立てのシイタケを食べた途端、「シイタケがこぎゃんおいしかて知らんだった!!」とびっくりしていました。

枝打ち体験、間伐見学

平成28年11月5日、天草地域みどり推進協議会や緑の少年団と協力して林業体験活動と交流会を行いました。参加者は、みどり推進協議会のメンバーと、緑の少年団の子供たちです。今回参加してくれた少年団は、下は小学校低学年から上は中学生まで、合わせて4団35名でした。場所は、天草市にある菖蒲園で有名な西の久保公園です。

午前中は、みどり推進協議会の主催で、育樹活動を行いました。内容は、公園内のヒノキ林での枝打ちと間伐です。林研メンバーと地元森林組合の方々とで、子供たちに作業の指導をしました。

まず、地元森林組合のベテラン森林整備員さんがデモンストラーションをしてくれました。枝打ち用のはしごを使い、高いところに登って枝打ちをしながら、枝打ち

がなぜ必要なのか、また、周りに
気をつけて作業するよう説明をし
ました。

子供たちは、枝打ちはしごを
使った作業は危ないので、地上
から枝打ち用の長いノコギリを
使った作業です。中学生には簡単
そうでしたが、小学校低学年の
子供たちにとっては、身長は2倍
はありそうな枝打ちノコギリを扱
うのは難しそうです。それでも、
腕を精一杯伸ばし、届くぎりぎり
のところまで枝を払おうとする子
供たちを林研メンバーが支えなが
ら作業しました。「まだこつちの
木には枝が残ってるよー!!」「が
んばらんかい、もつと腰ば入れて
引けー!」といったメンバーの声
が飛び交い、子供たちも「うまく
切れたー」「高くて届かん!」と
言いながらも、楽しく作業してい
たようです。終わった時にはスツ
キリきれいなヒノキ林になりました。
「これなら木もののびのび成長
できそうやね」と、枝打ちの効果
を感じてもらえたようです。

間伐は、開催地の公園内で伐倒
できる本数が限られていたため、
森林組合の整備員さんの伐倒作業

を見学する形となりました。まず、
枝打ちの時と同様、林内で間伐作
業について説明してもらいました。

その後、整備員さんが伐倒する木
にチェーンソーで受け口を作りま
した。反対側に切り込みを入れた
後、子供たちにクサビを打ち込ん
でもらいました。伐倒時に大勢が
同じ場所にいると危険なので、整
備員さんを残し、みんなが安全な
場所まで離れて、伐倒する様子
を見守っていました。数本伐倒した
だけでしたが、枝打ち、間伐した
林内は、ちよつとスッキリして見
えました。

手作りを楽しむ みどりの少年団交流集会

午後からは、少年団の交流集会
です。森の恵みや自然にふれあい
ながら、他の少年団の子供たちと
交流を図る時間です。今回用意し
たメニューは、フィールドビンゴ
と木製のプレート作りです。林研
メンバーはプレート作り指導の担
当をしました。

木を薄くプレート上に切って乾
燥させたものを使い、ネームプレ
ートやペンダント等を作りました。

大きいものは壁掛けプレートなど、
小さいものは名札にします。

材料のプレートはノコギリで切
っただけの状態なので、まだ表面
がデコボコしています。まずは、
表面をツルツルにするため、紙
やすりでひたすら磨いていきます。
きれいになったところで、林研メ
ンバーがドリルで紐を通す穴を開
けました。そこまでできたら、最
後の仕上げ、装飾です。マジック
で文字や絵を描いたり、シールを
張ったり、リボン

をつけたり、みん
な個性的に仕上げ
ていました。今回
はマジックやシー
ルなどを活用しま
したが、次に開催
するときはドンダ
リなどの木の実や
ツル、小枝など、
山の中にある材料
を使いたいね、と
来年度に向けての
改善点が提案され
ました。

また、当日プ
レート作りだけ



木製おもちゃ作りの様子



まつぼっくりで作ったフクロウ



みどりの少年団交流集会では、みんなで木製プレート作り



丸太切りに挑戦

は物足りない子がいるはず！と思い、子供たちに自分で好きな厚みに切ってもらうように丸太も用意していました。林研メンバーが「鍋敷きば作ってお母さんのお土産にしまっせ」と言う、子供たちはノコギリの使い方を教わりながら、一生懸命丸太切りをしていました。直径15cmほどの丸太ではありましたが、枝打ちとは違い、やはりその太さに苦戦している子もいた

ようです。

豊かな経験を生かして 天草林研のこれから

天草林研は、発足から55年余りが過ぎました。メンバーの皆さんはこれまで、天草地域林業の活性化の牽引役として活動してきました。若いころ入会したメンバーがまだまだがんばって活動していますが、最初にも紹介したように、大半のメンバーが65歳以上となっております。メンバーの高齢化が進んでいます。

また、天草と九州本土が橋で結ばれて50年です。林

業に例えるならば、50年生のスギ、55年生のヒノキという、成熟した森林資源です。天草林研の活動も、長い年月をかけて「豊かな経験」という天草地域の宝を蓄積してきたと思います。次の世代は、この宝を利



天草林研発足 50 周年記念植樹（平成 23 年）

活用し地域に寄与する世代です。

天草地域は県内でも高齢化率が高い地域です。それでも、一生懸命に地域振興のために力を尽くしている若い人も大勢います。今後、地域の人々や森林組合の若手職員の皆さんと一緒に、子供たちの育成を行いながら新たな活動を模索していきたいと思っています。

*まとめ

天草林業研究グループ連絡協議会事務局

作業中の事故ゼロをめざして 林業女性のための安全作業研修会



安全作業研修会の「応用編」で
刈払機点検について説明を聞く受講生たち

山口県林業研究グループ連絡協議会

「山口県」

児童、学生、女性、地域に
向けて活発な活動を展開

山口県林業研究グループ連絡協
議会（以下、協議会）は、グルー
プ活動の促進と林業技術の研究、

地域林業の振興を目的として昭和
41年に設立し、今年度50周年を迎
えました。会員数は約900名。
県や市町、他団体と連携しながら
林業技術の研究・研鑽を行うほか、
子供たちや都市住民を対象とした
森林体験を実施するなど後継者育
成と森林・林業をPRする活動に
取り組んでいます。

その中でも女性部の活動は活発
で、草木染めや竹炭、蔓細工、木工、
山野草といった森林資源を活かし
た作品の製作・販売など各グルー
プが特色ある活動を行っています。
当協議会の主な活動は次の通り
です。

◆森林体験学習

次代を担う子供たちを対象に、
森林の役割や林業などへの理解促
進を図っています。

◆高校生を対象としたインターン シップ

林業後継者の育成・確保を図る

ため、県立山口農業高等学校環境
科学課コースの生徒に、森林作業
やシイタケ栽培などインターンシ
ップ事業に取り組んでいるほか、
将来木材を利用する側になること
が期待される県立萩商工高等学校
建築コースの生徒にも森林体験や
木造建築の見学会などを実施し、
木材の良さを伝えています。

◆森林・林業の普及啓発活動

森林の重要性や森林整備の必要
性等の理解促進を図るため、都市
住民を対象に自然体験や林業体験
木工教室などの交流活動を行って
います。

◆林業女性によるタケノコの地産 地消運動

竹林の繁茂を抑制し、食を通じ
て竹林整備に理解を求めていくこ
とを目的に、一般県民を対象とし
た料理教室などを実施しています。

◆林業女性いどばた交流会

県下の林業女性が一堂に会し、

お互いが持つている技術を教えあう交流会を開催し、親睦を深めると同時に森林・林業に関する知恵や技を高め合っています。

安全を最優先にした作業

刈払機やチェーンソーは森林作業において大きな力を発揮する欠かせない機械です。日常的に使われる方も多いと思います。しかし、身近な機械であっても、使い方を誤れば、重大な事故につながります。近年残念ながら、山口県内でも伐採作業中の死亡事故が発生しました。

また、重大事故には至らなくとも、林研グループや森林ボランティアの会員が怪我をしたという話も耳にします。事故の傾向として、初心者については「知らないことが原因で起こる事故」、熟練者は「うっかりによる事故」が多く見られます。まずは「知らないことが原因で起こる事故」を少しでも減らしていくため、昨年度より女性を対象とした安全な作業方法を学ぶ研修会を開催することとしました。

昨年度は、県下2会場で、チェ



自己紹介から研修スタート

ーンソー・刈払機を中心に安全な作業方法の講義とチェーンソーの点検・整備の方法について学びました。

講師は山口県木材協会の安全指導員として多くの実績を持ち、林業技士で、豊北町林業研究会会長でもある熊井稔さんをお願いしました。女性ばかりの研修は初めてのことでしたが、事故の発生傾向、チェーンソー・刈払機の仕組み、安全な装備や作業方法など、見本を見せながら易しい言葉でわかりやすく、時にはユーモアを交えながら説明していただき、大変好評でした。

基礎・応用・実践、3種類に分けた研修

受講生からは「林業指導センターなどでチェーンソーの研修があるのは知っていたが、男性ばかりの中で受講するのは気後れして参加できなかった。女性だけの研修が開催されて良かった」と嬉しい声を聞くことができました。

その声に後押しされ、2年目の今年は、昨年同様の内容の研修を「基礎編」とするほか、刈払機の点検整備とチェーンソーの目立てを行う「応用編」、さらに実際に山で伐採作業を行う「実践編」と3種類の研修を企画しました。講師は引き続き熊井さんです。

【基礎編】

基礎編では最初に安全な作業方法について学びます。特にヘルメット、耳栓、手袋、ゴーグルなど保護具を適切に着用することは安全の基本です。チェーンソーによる切創事故は

下半身に集中しているため、特殊繊維でできた防護衣を着用することは怪我を防ぐのに重要な役割を果たします。中の繊維がチェーンに瞬時に巻き付いて動きを止める仕組みについて、写真や実物を見せながら理解してもらいました。また、刈払機や伐木作業の危険区域、キックバックの仕組み、かかり木処理方法については、重大な事故につながる恐れがあるため皆さん熱心に話を聞き入っていました。

午後からは班ごとに分かれ、チェーンソーの点検・整備方法の実習を行いました。「機械整備は主人に任せている」という方や、チェーンソー整備は初めてという方



「基礎編」でのチェーンソーの点検



真剣にヤスリを当てる受講生

が多かったのですが、いざ整備を始めると、細かい隙間の汚れまで丁寧に掃除されているのが印象的でした。受講生が講師を質問攻めにする場面もあり、「これだけ質問してもらえれば、研修をした甲斐がある」と熊井さんも喜ばれていました。

【応用編】

応用編では初めに刈払機の点検・整備方法を学びます。山仕事だけでなく、田畑や庭の草刈りと、チェーンソー以上に出番の多い機械ですが、受講生に聞くと点検・整備については、おろそかに



「応用編」でのチェーンソーの目立て

なっている場合が多いようでした。飛散防護カバーの位置は正しいか、エアクリーナーは汚れていないか、フレキシブルシャフトの状態、グリースを指す位置など1つ1つ点検していきました。

午後からはチェーンソーの目立てです。この目立ては初年度からとても要望の多い研修項目でした。ヤスリ片手に皆真剣に刃に向かいます。目立ての基本

は、正しいヤスリの当て方を覚えること、目立て角度と刃長を揃えることです。しかし「言うは易し、行うは難し」で、力の入れ具合が難しく受講生は苦労していました。各メーカーから販売されている目

立ての補助具などを用いながら、なんとか目立てを終えました。

最後に熊井さんから「ソーチェーンの目立ては『泣くほど研げ、笑うほど伐れる』と言われています。あとは実行あるのみ。頑張ってください」とエールをいただきました。

【実践編】

いよいよ実際の木を伐る実践編です。林業女性の活動においてシイタケ栽培も多く行われていることから、スギやヒノキなど基本となる針葉樹の伐採方法のほか、広葉樹の伐採・造材の方法もカリキュラムに組み込みました。

最初に丸太の輪切りを行い、チェーンソーの動かし方、力の加え方を体に覚え込ませます。その後、熊井さんに伐木について周囲の確認、待避場所、受け口の作り方など順を追って一から教えていただきました。

午後からは広葉樹の伐採です。広葉樹は枝張りが良いため重心が傾いていたり、裂けやすかったり、萌芽更新により根本が二又、三又になっていたりと1本1本の個性も違うため、針葉樹の伐採以上に難しく、危険も多くなります。実際に伐採しながら注意点を確認しました。

チェーンソーを使った伐木作業と緊張が続く1日でしたが、現場の移動途中にキノコを見つけたり、休み時間に蔓を集めたりと林業女性らしい和やかな研修会となりました。

【研修を終えて】

基礎編、応用編については同じ内容を山口市と岩国市の2会場で実施しました。しかし運悪く山口市で開催した2日間とも山口市ではめずらしい大雪に見舞われてしまい、開催自体危ぶまれたのです

女性林業就業促進 「林業体験ツアー」

が、チェーンソー・刈払機に熱意を持った受講生が続々と集まり、成功裏に終えることができました。

今年度はこの安全作業研修のほか、女性の林業就業促進のため、林業女性が活躍する森林作業現場の見学と意見交換を行う、女性限定の「林業体験ツアー」を開催しました。林業就業をうたったツアーに人が集まるか不安でしたが、

安全であってこそこの活動を これからも

今回の安全作業研修会では「自

高校生、大学生、社会人、主婦の方などたくさんの方に参加していただきました。すぐに林業就業とはいきませんが、そのツアーがきっかけでこの安全作業研修会を受講されたり、安全作業研修受講生のご家族が山口県主催の林業基礎講座に参加されたり、嬉しい波及効果が見られました。

分が怪我をしない」「他人に怪我をさせない」はもちろんですが、「事故に巻き込まれない」ということもポイントに揭げました。起こそうと思っただけで起きる事故はありません。いくつかのうっかりやミスが重なり事故につながっていきます。自分が作業していないときでも油断せず、他所作業の危険区域に立ち入らないなど、安全を他人任せにせず、自分が注意することも不慮の事故を減らす手立てです。

林業はきつい、汚い、危険という3Kのイメージが強くなります。楽しいグループ活動も安全であってこそ。研修で学んだことを、家族や仲間と共有し、林業の持つ「危険」というイメージを改善していくよう、皆で安全作業に取り組んでいきたいと思えます。

＊まとめ

山口県林業研究グループ連絡協議会事務局



「実践編」での丸太玉切り



「実践編」での広葉樹の伐採



切り株から検証（「実践編」）

事

女性林業者への安全研修会・女性への林業就業の働きかけ

例

女性が企画し、女性が教える チェーンソー講習会・体験報告会



チェーンソーが使える
「カッコかわいい林業女子」を
目指して

福岡県林業研究グループ連合会「福岡県」

林業女子が、
山への関心の輪を広げる

福岡県林業研究グループ連合

会（以下、福岡県林研）は、県内の林業研究グループの連絡組織として、昭和38年に設立され、現在、19の単位林研（会員数357名）

によって構成されています。福岡県林研では、特用林産物の栽培講座やふれあいフェスタ（県主催）でのマイはしづくり体験、林研内の指導者育成のためのチェーンソー講座などの活動を行ってきましたが、昨年から、女性林業者への研修を行っています。

県下では、女性林研が木工玩具の開発やシイタケやタケノコなどの特用林産物の加工研究等に取り組んできましたが、高齢化と共に昨年は2団体が解散することとなり（現在、女性林研は4団体）、次世代の女性林業者の育成が求められていました。

一方で、糸島市では平成26年に「林業女子会@ふくおか」が設立されました。現在、約140名の会員が「山や森のことをもっと知りたい、何かしたい」と思っている女子たちが、色々な視点から考え、発信していく会」として活動を行

い、昨年は、チェーンソーや刈払機の実技研修や、森の中のヨガなど幅広い活動を行ってきました。そんな林業女子たちの関心の高まりを背景に、女性向けの林業就業講座が企画されました。

昨年の女性林業者研修では、1泊2日のチェーンソー講座を企画したところ、「父が遺した山の管理を自分でしたい」「庭木の手入れがしたい」といった、一般の女性たちの参加を得ることができました。

今年の企画では、参加対象者の幅をより広げたいと、「女性林業者チェーンソー講習会」に加え、「女性林業者体験報告会」も実施する2本立ての構成にしました。事業を企画した事務局の橋川ひろみさん（福岡県農林業総合試験場資源活用研究センター）は、「すぐに女性林業者を増やすことは難しいですが、まずは少しずつ林業



目立て実習では手厚い講師陣の指導で徐々にコツを覚えた

ソー伐倒から下刈り、林業機械のオペレーターまでをこなす、まさにプロ中のプロの林業女子。平成27年度には、森林施業プランナーの認定を受け、志を持って林業に臨んでいる、県下の林業女子のトップランナーです。そんな伊藤さんに憧れの視線を

送る参加者10名は、「野焼きボラントイアをしているのですが、男性たちはチェーンソーを持って作業をしているの。私もやってみたくて」という50代の女性や、「父がチェーンソーを使うので、私も手伝えるようになりたい」という農林業の30代の女性など12名です。午前中のチェーンソー講座（座学）は、「木は腕力で伐るのではなく、チェーンソーの力に任せて伐るもの」という考えから、まずはチェーンソーの基礎を学ぶ時間

を充実させ、チェーンソーの構造やメンテナンスの方法、目立てが行われました。さらに、参加者や林研メンバーが持参したチェーンソーが10台以上が並ぶ中、メーカーや排気量の違い、メンテナンスの状況などを比較しながら、その中で、女性に向いている排気量や重さ、バーの長さなどの解説が行われました。目立て実習では、ソーチェーンのピッチ、ゲージ、

を応援してくれるファンを増やすところから始めたい」と言います。
指導に慣れた講師陣がチェーンソーを指導

12月2日に開催された「女性林業者チェーンソー講習会」の講師は、県林研会長（糸島市林研会長）の吉村正春さんと糸島市林研のメンバーたち。さらに、そこに力強い応援として加わったのが、伊藤里美さん（福岡県広域森林組合福岡北支所）です。伊藤さんは森林組合の現業職員として、チェーン



構造の基礎から学ぶチェーンソー講座



チェーンソーの構え方から教わった

デブスなど聞きなれない言葉に戸惑う参加者もいましたが、グループごと配置された手厚い講師陣からの指導を受けて、徐々に目立ての重要性や作業のポイントの理解が進んだようでした。

女性林業者が魅せる、伐倒デモンストレーション

午後からは、林研が管理を任さ



女性の方がチェーンソーを上手に使いこなすと評価も高い

れている市有林での伐木実習です。山の中に入る女性たちの服装はカラフルで、急に濃緑の森林が華やいで見えます。そこでは、「安全のために服装から徹底する必要がある」と、全員がチャップスと防振手袋を着用してから、参加者が順々にチェーンソーを始動させていきます。最初に丁寧なレクチャーを受けているので、チェーン

ソーを怖がることもなく、どの参加者も落ち着いています。

丸太を使った玉切りや受け口、追い口の作り方の実習も順調で、指導に当たった糸島林研の西佳明副会長からは、「みなさん初めてとは思えない、びっくりするほど上手ですね。男性の方が力任せにチェーンソーを使おうとしますが、女性の良い意味で機械に頼るので、素直にチェーンソーを使えるようです」という感想です。

続く立木の伐倒では、まずは、伊藤里美さんによるデモンストレーションが行われました。県内の伐木選手権にも出場している伊藤さんの作業は、安全確認も的確で手早く流れるような作業です。その後、4班に分かれて伐倒の実践を重ねていきました。

実習後の参加者からは、「足場が悪い中で山作業をする大変さが分かった」という感想や、林家の女性は「夫も息子も我流でチェーンソーを使っているけれど、私が使い方を教えていきたい。チェーンソーの目立てや掃除などの手伝いもしたいし、新しいチェーンソーも買いたい」と、林業女子力ア

ップにより家庭内から変化が生まれそうでした。

また、「女性が山作業をするところがイメージでできなかったけれど、伊藤さんの颯爽とした姿を見て、初めて山で作業をしている様子がわかったような気がします。伊藤さんのカッコ良さにファンになりました」という声も聞かれました。また、林業女子会@ふくおかのメンバーからは、「カッコよくてかわいい、カッコかわいい林業女子を目指したい」というコメントも。

林業女子会代表の荒木洋美さんは「チェーンソーを人に教えられにくらいになりたい」と、頼もしい抱負です。そもそも、荒木さんは、薪ストーブのユーザーだったことから、糸島市林業研究クラブが主催するチェーンソー講座に参加したことがきっかけで林業女子になったとのこと。荒木さんによると、林業女子は、「食の安全に関心のある子どもを持つ若いお母さんや独身女性などは、森や林業への関心があり、森林・林業の情報を流すことで会員は増え続けている」と言います。活動を継続することで生まれる広がり期待が

持たれます。

互いを刺激し合う 体験報告会

12月3日には「女性林業者体験報告会」が開催され、3名の女性林業実践者の報告会と林業ツアーが行われました。

報告者は次の3名です。

①夫婦で植林から枝打ち、間伐など愛情をもって山仕事を50年近く続けてきた佐藤香代子さん。

②農林業の経験のなかった主婦が、旬栽培の2冊の書籍の教えを忠実に守り、3反の竹林で早出し筍の生産を始め、農林水産大臣賞を受賞された松尾京子さん。

③東北の震災の経験から糸島市で自給自足の暮らしを始めた畠山千春さん。畠山さ



プロの林業女子である伊藤里美さんによる伐倒見本やチェーンソーの技術指導を受けた

んは、狩猟も行い、「地域の暮らしそのものや生産のプロセスを商品化」した体験ツアーを行うなど、イターナーの視点から見えてくる農山村の魅力を紹介しました。

22名の参加者からは、女性らしい細やかな作業を重ねてこられた2人の女性林家への共感や、畠山さんの「よそ者視点、女性視点」が、これからの地域において必要になるといった意見が寄せられました。

午後からは、糸島市内の森林・林業関係施設の見学ツアーとして、糸島林研の女性会員が経営するクラフトショップや九州大学に新設された木造3階建てのゲストハウス、木工工房などの視察が行われました。木工工房では、地元材を使った木工食器の製作過程の見学と同時に、山の麓に移住し、ミツバチを養蜂したりしながら子育てをする工房のご夫婦のライフスタイルも垣間見ることができ、その暮らし方にも関心が集まりました。この日、講師の1人として参加していた伊藤里美さんは、「参加できて本当に良かった」と言います。「山を丁寧に管理してきた

女性林家たちの話や、狩猟にも興味を持つているので畠山さんの話が聞けて刺激がもらえました。ツアーでは、山とのつながりを知ることができて、私も俄然やる気が出て山仕事を頑張ろうと思いました。もっとこういう場で学んできたい」と、得たことが大きかったと語ります。

林業に女性が入ることで生まれる変化への期待

2日間の研修を通じ、プログラムの随所には、女性参加者に対応する細やかな気配りが見られました。参加者には、木のプレートにレーザー印字された可愛い名札が用意されていました。休憩時間にはお茶やお菓子が用意され、屋外での講座では、温かいハーブティが振る舞われました。両日とも昼食は地元食材を使った美味しい食事が用意されました（昼食代は実費徴収）。

これらの配慮に対して、橋川さんは「女性はイベントの企画内容が良くても食事面などの細かな点の印象が悪いと、全体の印象に影響するから」と考えたそうです。



女性林業者体験報告会では、3名の女性から林業等の体験が話された

ベントと重なったこともあり、参加者増にはつながりませんでした。次年度の広報について、「林研の女性会員は高齢者も多いので、チラシでの広報は継続しつつ、今回のような企画に興味を持つてくれる人はたくさんいるはずなので、そこへ届く情報発信の方法を探したい」と橋川さんは考えています。

吉村会長は、そもそ



木工工房では、地元材を使った木工品とともに、工房のご夫妻のライフスタイルにも関心が集まった

も女性の林業者が増えることについて、「林業に絶対良い影響を与えてくれるはず。とても期待している」と言います。「昔の登山のイメージは、汚くて危険というのが大半だったが、山ガールの登場で、衣装もカラフルになり登山の環境も整備されてきた。同じように、女性が林業に入ること、衣装や安全面やトイレの問題など林業の生活環境が改善されたり、世間からの見方も変わってくるのではないかと考え、積極的に後押ししたいと考えています。そのために、チェーンソー技術を学ぶ

実践研修に加え、女性林業者のネットワークづくりを進めていきたいと、次年度以降も意欲的に臨むことになっています。

＊まとめ 編集部



第2部

私たちの チャレンジ! モノづくり、 人づくり



事

私たちのチャレンジ！

例

額田木の駅プロジェクト 額田林業クラブ「愛知県」

「額田木の駅プロジェクト」
スタート！

平成27年5月15日、愛知県岡崎市の額田地区で「額田木の駅」が開駅しました。これは、額田地域の森林整備と未利用木材の有効活用を推進するとともに、地域経済の活性化に寄与することを目的とした取り組みで、間伐材を軽トラックに積んで気楽に出荷できるようにし、森林整備の担い手を増やすことによって森と地域を元気にしていこうとするものです。

始動までの道のり

額田林業クラブでは、手入れの行き届かない森林が増え、頭を悩ませていました。そんな中、木の駅を額田でもできないだろうかという思いから、平成26年7月に「よしの木の駅」（奈良県）を視察し、立ち上げ経緯、段取りなどを勉強



実行委員会の様子。左から加藤副委員長、唐澤事務局長、鈴木実行委員長、山本副委員長、寄田副委員長。全員額田林業クラブ員です

しました。

同じ頃、岡崎市議会バイオマス検討委員会と額田林業クラブで、地域の森林整備について話し合いを重ねました。その結果、地域の森林を良くしたいという両者の強い思いがつながり、

平成26年10月、額田林業クラブの山本恵一会長を中心に「額田木の駅準備委員会」を立ち上げ、「額田木の駅プロジェクト」が実現に向けて始動しました。同年11月には「旭木の駅（愛知県）」を視察し、心構え、改善点などについて話を聞き、参考にしました。

クラブ員が中心に

秋からの準備委員会では、誰が中心になってこのプロジェクトを引っ張っていくのか、議論を重ねました。



開駅は平成27年5月15日。額田地区内に8カ所の土場があります

そして翌27年2月、実行委員会を立ち上げ、実行委員長には額田林業クラブの鈴木啓允さんが選ばれました。鈴木さんは元額田町長で、まさしく地元のリーダー。「健全な森を作るために真剣に取り組んでいかなければならない。大きなうねりを作り出していきたい」と意気込みを語りました。

そして、その右腕となって事務を一手に取り仕切る事務局長に就任したのは唐澤晋平さんです。唐



額田林業クラブのメンバーが多く出荷しています

澤さんは、山の仕事がしたいと1年前に額田へ移住してきた、額田林業クラブのニューフェイスです。唐澤さんは林業の再興を望み、誰でも手軽に山仕事をして収入を得られる仕組みを考えていたこともあり、まさに適任でした。持ち前の機動力でぐいぐいプロジェクトを引っ張っています。

他のクラブ員も、様々な形でプロジェクトをサポートしています。「2m材では重くて運ぶのが大変。もっと手軽に木の駅に参加できるように」という意見を受け、材の販売先であるチップ業者と交渉し、業者が機械を改良することで1m材の出荷が可能にな

りました。

また、地元で山に関心のある人に「材を出荷しよう」と積極的に声を掛ける人や、林災防が主催するチェーンソーの研修に参加し、山の手入れをやってみようと意欲的になった伐倒未経験者もいます。

**額田林業クラブを中心に
たくさんの方が関わる**

実行委員会は出荷登録者104名、登録商店52店舗、その他関係者から構成され、総勢160名を超えます（平成29年1月時点）。ここで、細かいルールの設定等について何度も話し合いました。また、市の担当者が動き、国の交付金を活用し、岡崎市からの支援も受けられるようになりました。

これまでの実績は、平成27年度が出荷840t、森の健康券（地域通貨）475万9000円分、平成28年度（4～12月）が出荷1047t、森の健康券（地域通貨）595万2000円分流通しています。

たくさんの方が関わることで、様々なアイデアが生まれ、プロジェクトを作り上げていま

材を1t出荷すると6000円分の「森の健康券」（地域通貨）がもらえます。地域内の登録商店で使えます



す。例えば、下流域（安城市）のボランティアグループが森林整備に協力してくれることになりました。額田林業クラブから輪が広がり、少しでも多くの人がこのプロジェクトをきっかけに山に関心をもち、地域の森林整備が進み、地



額田林業クラブのみなさん

域経済の活性化につながることを期待します。

＊まとめ

西三河農林水産事務所 林務課
林業普及指導員 福井千里

（所属は執筆時）

事

私たちのチャレンジ！

例



毎春の「郡上市みどりの祭り」にて

物、壁飾り、置物など、5、6種類の作品の材料と見本を準備しますが、参加した子どもたちは、見本通りに作成したり、発想豊かにオリジナル作品を作成するなど様々です。また、「この実は何て名前？」「この実はどこに行けばあるの？」「木の枝、木の実、葉っぱも、みくんな宝物に見える



列車内でのクラフト体験

など手間のかかる準備も必要でしたが、参加者からは楽しかったと好評でした。

小学校のクラブ活動で指導

二つめが、小学校クラブ活動指導です。年10回開催される明宝小学校のクラブ活動でのクラフト指導や大和北小学校での親子教室で

地域イベントに華を添える

郡上リーフ・レディースは、山村地域である郡上において女性ならではの活動をしようと「森とのふれあいを 地域に広げよう！」をテーマに、子どもたちに「森林の良さ、楽しさ」を伝えていく活動を進めています。

クラフト作成指導 郡上リーフ・レディース「岐阜県」

柱となる活動は、二つあります。一つめは、イベントや山村地域振興につながる行事でのクラフト指導です。毎春の「郡上市みどりの祭り」や岐阜市で毎秋開催される「森と木とのふれあいフェア」でのクラフト指導に加え、郡上市明宝で行われるイベントでも毎年クラフト体験を行っています。

イベントごとに動

ねー」などの喜びの感想も聞かれます。

さらに、地元ローカル鉄道（長良川鉄道）とタイアップして、地域外からの親子連れが参加しやすいように列車内でのクラフト体験も企画しました。美濃太田駅から郡上八幡駅まで、揺れる列車の中でグルーガンの電源や、机の設置



子どもたちが木の実や小枝で作ったクラフト



明宝小学校でのクラブ活動

会員たちは、小学生らにクラフ

日頃からの知識と材料集め

は、森林と私たちの生活の関わりについて学び、クラフト作品を作成しています。

毎年クラフト体験を選んで参加している子どもは、何も教えずくても自分で考え、創造力豊かに作品を作り上げていきます。また、山の産物を身近に感じることで、森林に興味を持つ子どもたちが増えてきたと感じています。

トづくりをきちんと教えらるよう知識の向上を常に意識しています。また、クラフトの材料は、年に一度、全員で山に入り、木の実、小枝などを採取しますが、それとは別に、会員個々の家庭で、花を栽培して乾燥花をつくるなど、日頃から材料集めを心がけています。

会員同士、本心に仲がよく、同じ目的に向かって進んでいます。イベントには、毎回全

員が集まることができませんが、都合のつく者で準備から当日の指導まで行っています。

豊かな森は川へ、川から海へ、そして私たちの暮らしへとつながっています。私たちの活動により、山や緑が大切ということを気づく子どもたちが増え、将来、自ら山へ入り、山を守り、緑の森を次世代へとつないでいってくれることを期待します。

＊まとめ
郡上リーフ・レディース
副代表 武藤みさを



郡上リーフ・レディースのみなさん



指導を受けながら、子どもたちが想像力豊かに作った作品の数々

事

私たちのチャレンジ！

例

薪割り体験会 なんぶの森でつながる会「青森県」

新たな林研が発足

今年度春から林業研究グループに新規仲間入りをした「なんぶの森でつながる会（以下、本会）」の、森林管理技術の向上と後継者育成を目的とした取り組みを紹介いたします。

もともとは八戸市の郊外で、自給用の田んぼを活用して、田植えから収穫までの体験会を仲間とともに開催していました。が、「しごと」を通じて大人も子どももイキイキと楽しそうに作業している姿に強く感銘を受けました。こうした活動を林業でもできないかと思ひ、森づくりの技術だけでなく、農山村の現状や林業が抱える問題なども共有する機会として、「山の

おしごと体験会」と題した体験会を始めました。誰でも気軽に参加でき、一緒に働く楽しさを体験できることを基本としています。一般の方の森林・林業についての関心は低いと言われますが、本会の

体験会を通じ、木に触れ、森とかかわることによって得られる「気づき」と「共有」を大切にし、共に成長できる場づくりに努めています。



「山のおしごと体験会」での間伐体験



なんぶの森でつながる会のメンバー。右が著者



薪割り体験は
人気のプログラム

異業種の4人が メンバー

本会の4人のメンバーは、全員が薪ストーブのユーザーでもあり、もともと山が好き、森が好き、木が好きな40歳過ぎの同世代の有志の集まりです。「薪を購入するだけでなく、自らチェーンソーを持って燃料を調達したい」、「森林・林業に少しでもかかわりたい」という思いが合



薪割り体験に熱中する子ども

今後はさらに「薪ステーション」の設置を目指しています。そこから はじまる人と人とのつながり、そして森へとつながる場になればと考えています。

薪を 市街地などで行われる各種イベントにも積極的に参加して、薪割りの体験会を行っています。薪を

致しました。代表者は森林組合の職員ですが、ほかは会社役員、自営業、地方公務員といった構成で、業種にかかわらず枠を超えて集った有志の会です。

地域の間伐作業を受託

間伐を必要とする森林の所有者に働きかけて、間伐作業を受託しています。今年度は約4 haの森林整備を行う予定です。場所は八戸市を中心とした近郊の里山、活動は休日を中心のいわゆる週末林業です。春から夏にかけては朝5時

に現場に集合して活動しています。が、早朝の静けさと清々しさは、日頃のストレスも吹き飛ばす気持ち良さです。八戸は降雪が少ない太平洋側気候でもあることから、四季を通じて活動することによって得られる経験を皆と共有していきたいと思っています。

薪割りの爽快感・達成感

割る爽快感と達成感は、初めて体験する方には大変好評です。また、身近で手軽に薪を利用できるようにと、パール缶を使った簡単なロケットストーブづくりのワークショップも行っています。震災をきっかけに非常用ストーブとしてテレビなどでも紹介され、全国的な広がりを見せています。

また、今年度9月からは八戸工業大学感性デザイン学科学生たちと「プロジェクトデザイン」の講義の一貫として、農山村の抱える現状、そして森林・林業が抱える問題を取り上げ、



八戸工業大学の学生が現地を視察。薪割りを体験中



ロケットストーブづくりのワークショップ

*まとめ
なんぶの森でつながる会
代表 渡邊喜紀

事

私たちのチャレンジ！

例

新規就業の支援研修

兵庫県指導林家会「兵庫県」

指導林家・ 青年林業士の会

兵庫県指導林家会は、林業への熱心な取り組みにより知事の認定を受けた、県下各地の指導林家83名と青年林業士11名を統括した会で、各地のほかの林研グループに重複して属している方も多数います。なにぶんにも当会は大所帯なので、役員12名を中心に企画立案し、活動しています。今回はユニークな活動として自負している「林業就業促進支援事業」をご紹介します。

林業への 新規就業を応援

林業への新規就業を促進するため、県内で唯一の林業関連学科を有する山崎高校森林環境科学科の2年生の生徒、ならびに県立「山の学校」の生徒を対象にしたイン



グラップル体験研修中

ターンシップ授業を数年前より行ってきました。2年前からは新

に、一般の方で林業に興味がある方、就職・転職を考えている方、

所有林の作業をしたい方などを新聞等で募集し、林業体験研修を実施しています。

研修では、搬出間伐の一連の作業（チェーンソー伐倒・グラップル集材・プロセッサ造材・フォワーダ運搬）を体験しま



チェーンソー伐倒指導

す。一般向け研修は、2～3人のグループで、インターンシップとは別に日を設定し、1日かけて行います。この2年間で体験者（インターンシップを除く）は延べ20名（20～50代）を超え、女性の参加も2名ありました。

研修は、高性能林業機械を装備して間伐搬出作業を行なっている模範的な会員（事業体）の現場で実施しています。この研修は初心者を対象にしているので、会員の現場の状況（地形・樹齢等）を考慮して研修実施現場を選考し、割

り振って行っています。

実績は3名の就業

参加者の中には、高性能林業機械を初めて目にした方やチェーンソーに初めて触れた方もいました。森林ボランティアで手鋸でしか伐倒したことがないという方も。

指導する側が一番気を遣うのは、やはりチェーンソー伐倒です。40



ハーベスタ体験研修中



フォワーダ走行体験研修中



県立「山の学校」インターンシップ

50年生のスギ・ヒノキ林が主体です。まず伐倒の見本を見せ、受け口・追い口切りとツルの関係を丁寧に説明・指導した上で、実際に何本か伐倒してもらい、その

あと機械による集材と造材と積込運搬してもらいました。

一連の作業の中で皆さんが一番手こずっていたのは、グラップルとハーベスタ（プロセッサ）のよ

うで、複雑な両手の操作に慣れるのに四苦八苦されていました。ゲーム機世代の若い人は、さすがにのみ込みが早いのですが。

体験後の参加者の感想としては、チェーンソーでの伐倒と、枝払いと玉切りが自動的にできるハーベスタ（プロセッサ）の操作体験が一番感動したという声が多く聞かれました。

この就業研修体験者のうち、現在のところ3名の方が森林組合と事業体に就職されています。今後この事業を継続実施していきたいと思っています。

＊まとめ

兵庫県指導林家会
会長 小林 温

事

私たちのチャレンジ！

例

チェーンソー講習会

朝日森林もりのクラブ「長野県」

チェーンソー事故を防ぎたい！

朝日森林（もり）のクラブは、長野県指導林業士である高橋鉄則会長をリーダーとして、平成3年の設立以来、朝日村の森林で「小学生を主体とした森林学習」を主軸として活動しています。平成14年からは独自のチェーンソー講習会を実施し、年間20人以上の受講生が参加しています。会長いわく「ゆるく、楽しく、自由に」をモットーに、活動を継続してきました。

法令に則った本格的な講習会（特別教育）の実施へ

しかし、平成26年度のチェーンソー講習会では、上下スウェット＋スニーカー姿で来たり、ある程度講習を受けたのにエンジンすらかけられない受講生がいたりする

など、受講生の意識があま

りにも低いこ

とに強い危機

感を覚えまし

た。「このま

まではいけな

い。適正なカ

リキュラムで

しつかりとし

た講習をしな

ければ」と、

労働安全衛生

規則に沿った

特別教育（※）

を実施し、「正

しい知識を持

った安全意識

の高いチェー

ンソー使用者を育成する」ことを

目的に、会のメンバーたちが立ち

上がりました。

立ち上がってからが大変で、労



指導は丁寧に、じっくりと



真剣に講義を受ける受講生

※特別教育

チェーンソーを用いて立木の伐木、かかり木の処理または造材の業務に従事する場合は、学科7時間・実技6時間の特別教育を修了することが義務づけられています

働基準監督署との協議、教育用DV Dの購入、伐採に関する機具の調達、法令に沿ったカリキュラムの設定、保管が義務付けられてい

る「記録簿」の整備、講師陣の説明訓練など、さまざまなハードルをいくつも越えながら、準備を進めました。

受講生の 意識が変わった！

11月1・8・15日と、3日間の講習会がいよいよ始まりました。長野県林業士の会員が講師を務める講義では、林災防のテキストとDVDを使用しながら、緊迫感のある講義となりました。続く実習では、受講生を10人に絞った上に講師補助を多く配置し、マンツーマンに近い指導を実施しました。

3日間の講習に参加するうちに、受講生の意識も大きく変わりました。昼休みも講師とともに、チェーンソーを囲んで復習をするようになり、「こんなにも整備や目立てが大切とは知らなかった」、「今までどれだけ危険なことをしていたか、ぞつとする」と話す受講生もいました。中には、講習で指導した「防護衣」「安全靴」「チェーンソー用ヘルメット」をすぐに購入した人もいました。こうした受講生の熱意に講師陣もしつかりと応え、より丁寧な指導となっていました。

最終日は伐倒作業を森林内で実施しながら、安全の確保、伐倒方

向の決定、合図、退避など、具体的な動作・手順を受講生に指導しました。講師陣には「講習が終わっても、受講生が行う作業中に事故があれば、自分たちにも責任がある」という意識も生まれ、特別教育修了証を渡す時には、安堵と緊張が混じった表情でした。アンケートには「もっと時間をかけてほしい」、「もっと体験し、伐り

たい」との意見も多く、さらに知識や経験を求める受講生が多いと感じました。

地域林業の安全確保。 その一翼を担う

労働安全衛生法の重みを両肩に感じながら、地域林業の安全確保の一端を担っているとの達成感も得られた充実した3日間でした。



目立てを指導する講師の周りに群がる受講生

受講生の増員、実技ファイルの確保など、次年度に向けた課題もありますが、朝日森林のクラブとして胸を張れる活動が始まりました。周囲の長野県林業士とも連携し、さらに活動内容を充実させていきたいとの高橋会長の意向です。



カリキュラム終了後、充実した表情の受講生と講師

＊まとめ

松本地方事務所 林務課
林業普及指導員 久保田 淳

(所属は執筆時)

事

私たちのチャレンジ！

例

木のボールペン作り体験

たびと
田人林業研究会「福島県」

県内で最も古い歴史を持つ
林研グループ

福島県の田人（たびと）林業研究会（以下、当会）は、いわき市田人町で活動する林家により昭和51年2月に結成され、今年で結成40周年を迎えた県内で最も古い歴史を持つ林業研究グループです。発足当時から、林業を生業として、田人地域の振興のため様々な活動に取り組み、「磨丸太」を中心とした田人材の生産を行ってきました。

また、山から出した間伐材をクリスマスツリーとして地域の公共施設に飾ったり、都市との交流を図るため、地域に人を呼び込む「原木きのこの植菌・収穫体験」を実施してきました。そのほか、地元の小・中学校からの要請による学校の森林整備体験や木工工作活動の指導も継続して行ってきました。

地元の材を
ボールペンの軸に

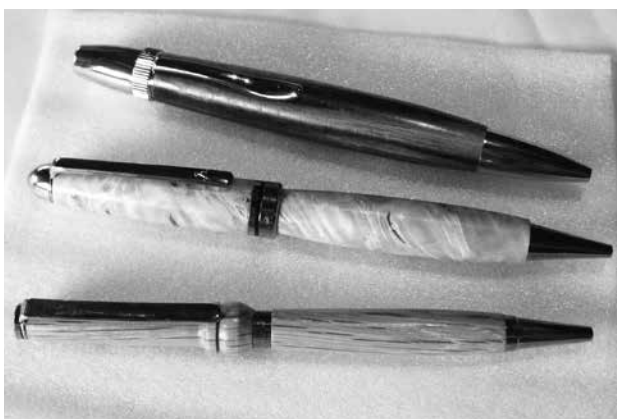
そのひとつである「木のボールペン作り体験」は、当会で木材の新たな利用を模索していた時に、隣県の木工作家による木工の研修で出会ったものです。その時は、

を3年ほど寝かせて乾燥させ、その後刻んだものをさらに1年以上乾燥させたものです。様々な色の材、見事な本を生かしたボールペンとなりました（中には樹齢200年以上のスギの枝を削ったものも）。

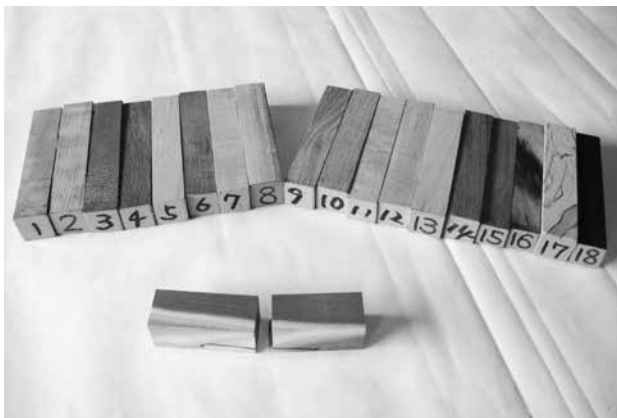
メープルの木を

使用していたので地元の木を使ってやってみようと考え、早速ろくろ機械を購入、新たな活動として取り組み準備を始めました。

ボールペンの軸の部分は、当会員が、地元の素材生産の現場で見つけたもの



色、模様、形が様々なボールペン



軸の材料（サクラ、スギ、ホオノキなど）。
こんなにたくさんの種類がありました



木のボールペンコレクション

生徒たちの卒業記念に

平成25年に、地域の小中学校から、学校統廃合の記念品として「木のボールペン作り体験」の依頼

えたデザインに沿って当会員が材料をろくろで回しながら刃物で丁寧に削り出していきます。その後生徒と一緒にろくろを使いながら紙やすり等で慎重に形を仕上げま



ろくろで製作。紙やすりで仕上げを行っています

を受けました。まず、クリ、コシアブラ、スギ、ヒノキ、ケヤキなど地域産材の軸の中から自分の気に入ったものを1本選んでもらい

ます。次に、生徒があらかじめす。金具等の取り付けは当会員が行い、汚れ止めに透明なニス塗り、布やおが屑で磨いて完成です。生徒たちにとって、地域の木材を使用して出来上がったボールペ



豊田会長（右）と会員の後継者

ンは他にはない自分だけのボールペンになったに違いありません。

この体験は、先生の口コミで広がり、地域の学校で卒業記念として取り組みたいという依頼が多く、昨年12月8日には中学生17名を対象に体験指導を行いました。これ

がきっかけで林業や木材に興味を持ち、将来林業や大工さんを目指す生徒がでてくることを当会では願っています。

この木製ボールペンは、各種イベントでも販売しており、樹種により大きく異なる本目の美しさが毎回好評で、当会のPRにも一役買っています。

設立当時小さな子どもだった会員の息子さんも、今では当会の一



40周年記念式で全員集合

員として活動に参加するなど、後継者も徐々に育っています。今後は若い発想も取り入れながら、地域に根ざした活動が継続されることを期待します。

＊まとめ

いわき農林事務所
林業課長 松崎 洋

（所属は執筆時）

事

私たちのチャレンジ！

例

「絵巻物から読み解く林業技術」講演会

群馬県林業研究グループ連絡協議会「群馬県」

先人の知恵・技術を探る

群馬県林業研究グループ連絡協議会（以下、県林研）は、昭和38年に設立されました。平成27年度現在、会員数は229名に及びます。

設立以来「赤城ふれあいの森まつり」への参加、「木の鼓」刊行等の林業普及活動に励んでいます。

その一環として、平成27年9月12日、群馬県庁にて県林研主催による「絵巻物から読み解く林業技術（後世に伝えたいもの）」明治伐木運材図絵」と題した講演会を行いました。

これは、群馬県内の山仕事の聞き書き本「聞き書き 山の親父のひとりごと3 群馬編 伐採・育苗・木馬」」（東京の林業家と語る会／編）刊行の縁で「東京の林業家と語る会」の羽鳥孝明氏と、烏川流域森林組合長の市川平治氏を講師に招き、市川氏所蔵の「明

治伐木運材図絵」を読み解きながら、先人たちの積み上げてきた山の文化、その知識、技術、精神を学び、現代の私たちがそれらを継承できているか、問いかけることを目的に行いました。

教材となった「明治伐木運材図絵」は、機械のなかった明治の頃に、どのように木材を伐り出していたか、その技術と努力を後世に伝えるために、昭和34年5月に田中萬藏時継氏によって作成されたものです。

五感をフル活用した技術

講演会では、図絵を一枚ずつ確認しながら、当時の様子を解説していきました。例えば、「ソマ切りの図」（次頁図）では、木こりが玉切りを、先山（さきやま）師が墨付けを、ソマ師が粗いながらも製材を行っています。

使う道具はシンプルな手道具のみであったことから、人間の五感をフルに活用した技能・技術を備えていたことが分かります。恐らく、状況を一瞬で判断しつつ、体を最も効果的に動かしていました。それを可能にする

「肉体の記憶」が存在していたのではないのでしょうか。

科学技術が発達した現代においても、本来は私たちにこそそれだけの潜在能力が備わっているということを忘れてはいけないうように、先人たちのように、木の力（価値）を最も引き出す努力を忘れてはいけないと思います。



「筏組の図」。運材トラックがない時代、牛や馬を使って引き出してきた材を河岸に集め、筏に組んで下流に運んでいた

出典：市川平治氏所蔵「明治伐木運材図絵」より



先山での製材の様子を描いた「ソマ切りの図」。

玉切り、墨付け、ソマ切り（大マサカリでの製材）、木屑を拾う人々が描かれている

出典：市川平治氏所蔵「明治伐木運材図絵」より

山の可能性を 引き出す力を

また、ソマ切りの木屑を拾い集めている子どもの姿からは、人びとが木材を無駄なく利用し、収入を得ていたことが分かります。

現代においても、森林の持つ可能性は大きく昔と変わりません。その可能性を引き出す力は、本来私たちにもあるはずです。山の恵みを最大限に有効活用しようとする先人の努力や知恵を学びつつ、人間の肉体に宿る業（技）を語り継ぐ大切さを講演会ではお伝えし



講演会の様子

ました。

この講演会には、県内林業関係者、東京の森林ボランティア、行政関係者など、およそ37人（講師含む）が参加しました。講演後のアンケートでは、「機械に頼るのみでなく学べるものは学び、技として使っていくべき」、「今まで知らなかったことが多く、大変参考になった」という感想が寄せられました。

県林研では、これからも林業の啓蒙、技術・精神の継承に努めていきたいと考えています。

*まとめ

群馬県林業研究グループ連絡協議会
副会長 小森谷孝志

「聞き書き 山の親父のひとりごと3 群馬編 伐採・育苗・木馬…」

東京の林業家と語る会／編
実費／1000円（税込み）

●入手方法の問い合わせ先：

群馬県林業研究グループ連絡協議会
事務局 森田

TEL：027-226-3235

FAX：027-223-0154

Eメール：morita-e@pref.gunma.lg.jp

事

私たちのチャレンジ！

例

木工クラフト指導

NPO法人森づくり奈良クラブ「奈良県」

木の良さを知る きっかけに

「NPO法人 森づくり奈良クラブ」は、奈良盆地を南北に伸びる県立矢田自然公園「矢田山遊びの森」を拠点に活動をしています。「安全第一、気軽に楽しい森づくり」をモットーに、約40名の会員が森林の整備、草木染め、炭焼き、植樹祭等のイベント開催や、クラフト、自然観察、森林作業等の講師派遣、森林・林業に関わる幅広い活動をしています。

奈良県でも、人口が集中する奈良盆地周辺では森林が少なく、子どもたちの多くは、森林を身近なものと感じる機会があまりありません。そこで、同クラブは、木で何かを作る体験が、木や森に親しみ、木の良さを知るきっかけになると考え、10年ほど前から木工クラフトの指導をしています。昨年

度は12のイベントでクラフト指導を行い、823人が参加しました。

大人気！ クラフト体験

そのうちのひとつ、奈良市東部の



テントからはみ出すほどの人気

県立野外活動センターで毎年開催される「奈良県山の日・川の日」イベントでは、各団体が特色のある出展を競う中、木工クラフト体験は大人気でした。子どもたちは、最初、何

を作ったらいいのかわからないのが悩みますが、次第に工夫を始め、自分なりの作品に発展させます。木の枝、どんぐり、竹等の材料を組み合わせ、いろいろな作品を作りました。この例に限らず、実際の指導の場面では、はじめに作り方の手順

書を配ったり、口頭で説明したり、見本を作って見せたりしますが、子どもたちにクラフト体験を喜んでもらうために、作る人の自由な発想に任せています（見本とは違ったものを作ること奨励しています）。例えば、竹笛の吹き口の穴は一つですが、別の個所にも一つ穴を開け、音色を楽しんだ子がいました。このような、大人の固定観念にとらわれない、子どもたちの豊かな発想を歓迎しています。



木や竹の枝で作ったカフトムシ・クワガタ

楽しんでもらう工夫

クラフト指導では、各イベントの主旨（虫祭りなら虫に関連するテーマ等）、参加人数、子どもたちの年齢等に応じて、作る物（テーマ）を決めています。

作る物は、「森づくりから得た木材・竹材・木の実などを使ってクラフトを作る」ことがコンセプトなので、竹のおもちゃ（竹トンボ、ガリガリトンボ、竹ボックリ、ジージーゼミ）、木の輪切りや枝を使ったペンダント、松ぼっくりや木の実を使った動物や昆虫等となります。これらの作品のレパ



カブトムシ・クワガタのクラフトの材料

トリーは、本や雑誌、インターネット、ほかのイベントで作られていたものを参考に、日々増やしています。

材料となる木や竹の輪切り、小枝は普段の活動中に採取しておきます。木の実は、なる場所を普段から確認しておき、落ちる時期に



子どもたちの自由な発想を引き出すよう指導

なったら採取します。

こうした努力が功を奏し、当クラブのクラフト体験は盛況で、最近では目玉企画として、多くのイベント出展へのオファーがあります。当クラブは、これらのイベントに積極的に参加することで、大切な財産である山と川を、未来を



クラブ会員の面々

担う子どもたちへ託したいと望んでいます。

＊まとめ

北部農林振興事務所 農林普及課
林業普及指導員 白井 実

（所属は執筆時）

事

私たちのチャレンジ！

例

「竹取のかぐや」〜竹やぶ対策活動〜 樹冠ネットワーク「島根県」

女性中心の 竹やぶ対策プロジェクト

「樹冠ネットワーク」は、主に島根県の中央部（邑智郡・江津市・浜田市）、一級河川江の川沿線を活動拠点とするグループ（樋口千代子代表／会員数43名）で、文字通り樹の頭（冠）部分を繋ぐことを意味しており、老若男女それぞれが知恵を出し合い、協力し、楽しく、生き生きと活動しています。

「竹取のかぐや」は竹やぶ対策活動のことで、当グループの女性メンバーが中心となり、平成26年から取り組んでいます。平成25年に実施されたイベント「竹やぶを宝に変える！」で、他県での竹やぶ対策の取り組み事例発表を聞き、自分たちも何かしなければと集まった、幅広い年代の女性たちが立ち上げた活動なので、翁でも姫でもなく、こう命名されました。本



自作の竹パウダー製造機

会会員以外にも多数が活動に参加されています。

竹の利用方法を実証

活動では、竹林の整備（伐採）および竹の有効利用により、荒廃

竹林の解決を目指しています。竹の伐採は人手を掛けられませんが、伐採した竹の処理が竹林整備の一番の課題とのこと。そこで、竹の利用方法の実証をメインとした活動を行うこととしました。

竹の利用方法別

に4地区に分かれて活動を実施し、四つの実証を行っています。一つ目は、チップ・パウダー化や竹炭にして、農業に利用する方法の検討。二つ目は、土砂の流出を防ぐ竹柵工の設置等、災害対策利用の検討。三つ目は建築材として、四つ目は食器等としての利用の検討です。



土砂崩れを防ぐ竹柵工

竹チップで甘いトマトを

中でも、チップ・パウダー化の実証で成果が始め、メンバーの中には、独自に肥料としての利用法を研究し、有機肥料として施用すると甘いトマト等が出来ることから、野菜を東京市場へ売り出す



竹食器で昼食

取り組みを始めた方もいるそうです。移動式チップパーだと、竹1本を1〜2分で処理できます。竹チップを積み上げて3カ月から半年寝かせておけば肥料になりますが、商品化する場合は、竹チップと米ぬか、茶殻等を混ぜて堆肥舎で発酵させ、切り返し等を行います。

パウダー化には、会員自作のパウダーマシンの使います。処理時間がかかり効率は悪いものの、竹パウダーは家畜の飼料や漬物用のぬか床に混ぜたり、パンに混ぜて焼くなど、食用に利用できます。

活動成果として、平成26年は竹林整備面積8・3ha（参加者450人）、関連イベント10回（参加者300人）、今年度も同様の活動を予定しています。

今後も、引き続き竹やぶから竹林に戻す活動の普及と、地域住民に対して森林・林業を理解してもらう広告塔としての役割に期待したいと思います。

＊まとめ

西部農林振興センター県央事務所
林業普及第二課

専門林業普及員 土屋浩志

（所属は執筆時）



竹チップ作り



「竹堆肥研究会」見学。竹チップ、米ぬか、茶殻を混ぜて発酵中



「竹取のかぐや」のメンバー（一部）

事

私たちのチャレンジ！

例



伐り出し作業後の記念写真

炭焼き体験講座

福岡市林業研究グループ「福岡県」

地元の雑木林と炭窯を活用

福岡市林業研究グループは、旧

早良森林組合と旧福岡市森林組合の合併により昭和52年に設立されました。現在の会員数は29名、年齢は30代から70代、職業も農林業

や会社員と幅広い構成になっています。

近年、林研グループの活動が下火になる中で何かできないかと思案したところ、「高校生等に対する林業経営・就業体験等事業」として、地元に残る炭窯を活用し炭焼き体験講座を行うことにしました。昨年度、地元の脇山小学校5年生13人を対象に、炭焼きの一連の手順を学んでもらうため全4回の講座を企画しました。

**伐採、玉切り、
詰め込み、炭出しを
体験**

1回目（11／6）は、当グループの馬男木（まなぎ）会長が講師となり、炭焼きと炭の使い方だけでなく、日本の森林と林業について知ってもらうために、小学校で2時限分の座学を行いました。

2回目（11／24）は、会員の親



玉切り作業。
ノコギリの使い方も上達

戚が所有する近所の雑木林に入つて、炭にする材を伐り出しました。雑木（主にカシ）は胸高直径こそ14cm程度ですが、慣れない斜面でのノコギリを使った伐採に、児童は当初戸惑っていました。

必要な量の材を集められるかと心配しましたが、1本2本と伐るうちに作業にも慣れ、80cmの長さにそろえる玉切り作業もスムーズに進み、十分な炭材を準備することができました。

3回目（12／15）は、炭窯への



炭窯を所有する鶴田氏による炭焼きの工程説明



出した炭は切って袋詰めに

詰め込み作業を行いました。舞台は炭材を伐り出した雑木林のそばにある炭焼き小屋です。ここではまず炭窯のつくりや炭焼きの方法について、当グループ会員から説明を受けました。児童だけでなく、炭焼き未経験の会員も説明に聞き入っていました。

4回目（1／13）は、いよいよ



全身炭だらけになって炭出し

炭出しです。火入れから窯止めまでを管理していただいた炭窯の所有者でもある鶴田氏と会長より、詳しい説明を受けました。炭窯の入り口は赤土で完全にふさがれていました。炭がうまく焼けているかどうか、明かりをもつて中に

入ると、入り口から1mほど入った辺りから炭がびっしり並んでいるのが分かりました。一安心しましたが、そこから児童と会員とで炭だらけになりながら炭を取り出しました。できあがった炭は全部で220kgほどで、児童と会員で分け、残りは地元のキャンプ場に引き取ってもらいました。

地元の里山を知ってほしい

この講座の目的は、単に炭の焼き方を学ぶだけでなく、身近な里山の森林に目を向けてもらい、福岡の山の現状を理解してもらうことでした。「ノコギリの使い方が分かった」、「作業が楽しかった」、「山の事も勉強になった」という児童や保護者の反応から、目的を達することができたと思います。大人になって、山を見たときにはこの時の体験を思い出してほしいと願っています。

＊まとめ

福岡県広域森林組合 福岡西支店
富安謙太郎

（所属は執筆時）

事

私たちのチャレンジ！

例

Mスターコンテナで苗木生産

高千穂町林業研究グループ連絡協議会「宮崎県」

高千穂町林業研究

グループ連絡協議会は、昭和53年に結成され、毎年、県外視察や他県の林研グループとの交流会を実施するなど、県内でも歴史と活気ある林研グループの一つでしたが、林業の衰退とともに会員数も減少し、解散の危機に瀕していました。このような中、魅力ある林業を後生に伝えるために若い会員が立ち上がり、新たな挑戦をしています。

苗木の安定供給を目指して

当林研が活動する高千穂町では、毎年50ha程度のスギが植林されていますが、その苗木のほとんどは町外から移入されていて、他地域



ポット代わりの樹脂シート

の需給動向に強く影響されます。今後、主伐の増加に伴う再造林の必要性が一層高まり、これに不可欠な苗木の安定供給は地域の課題の一つであったことから、当林研の活動として、Mスターコンテナ苗の生産に取り組むこととしました。コンテナ苗とは、根と培地が一体化した根鉢付きの苗で、根鉢がスリム・軽量で活着が良く、通

年植栽が可能なことから、労力の軽減・分散化が期待できます。その中でもMスターコンテナは、育苗シートの内側が波状になつていて、根巻き（ルーピング）が防止できる等の特徴があります。また、市販の農業用ポットトレーとポットの代わりとなる樹脂シート（梱包資材）を活用できることから、他のコンテナに比べて初期投資が少なく、小規模生産でも取り組みやすいと考えられます。

プロからの指導

当林研は、苗木生産に関して全くの素人であったため、まず平成27年3月に、県内で



穂木の成形作業



Mスターコンテナ苗



穂木を育苗箱に挿す(箱挿し)

トップクラスの生産者である川南町の林田農園さんにご協力いただき、農園内の母樹を利用し、コンテナ苗用の採穂作業等の研修を実施しました。採穂した穂木はその日のうちに持ち帰り、成形して、発根剤（オキシベロン）へ漬け込み、翌日にはボラ土（軽石系の用土）を入れたトレーへ箱挿ししました。

その後、箱挿しした苗木はビニールや寒冷紗で被覆し散水するなど、温度・水分管理等を行います。箱挿し密度が高かったことや過度の散水から6月にカビが発生し、約50%が枯死しました。7月には、残った苗を培地であるヤシ殻ピートと針葉樹バーク堆肥を混合したものに、肥料としてハイドロコントロールを配合し、Mスターコンテナへの巻き付け作業を実施しました。

また、林田農園さんから西臼杵地域の生育環境に適した「西臼杵4号」の苗木40本を購入し、今後の苗木生産の母樹とするため植栽を行いました。

高千穂林研の再出発

採穂作業から巻き付け作業に至るまで、台風でハウスが倒壊したり、



苗と培地を樹脂シートで巻く（巻き付け）

温度・水分管理に失敗するなど、様々な困難を会員で協力しながら乗り越えられたことは、苗木の地産地消に向けた大きな一歩になったのではないかと思います。

この活動を核として再出発した当林研は、様々な業種の方々にも新たに加入いただき、会員数が5人から15人に増え、活気を取り戻しつつあります。

近い将来、神々しい高千穂の

山々に高千穂林研が育てたコンテナ苗が植林されることを願いながら、これからも生産技術の研鑽等に努められ、地域林業を支える力強い担い手として活躍されることを期待しています。

＊まとめ

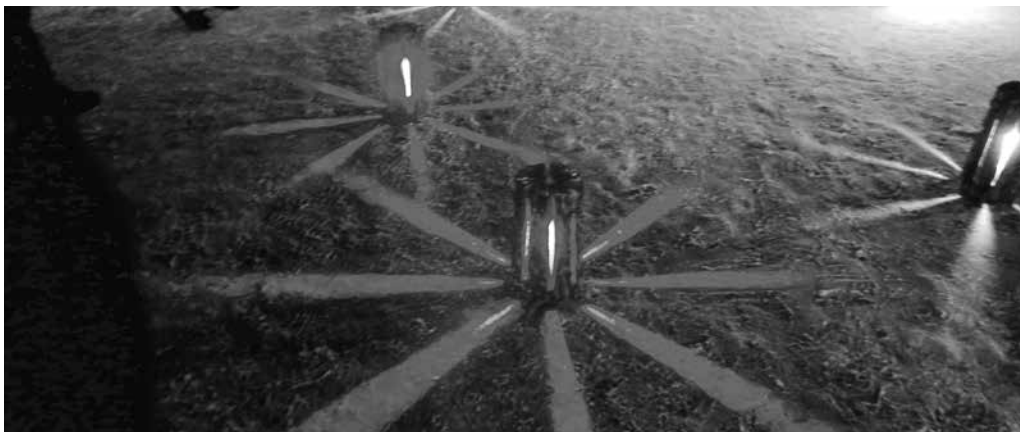
西臼杵支庁林務課
林業普及指導員 河野浩生

Mスターコンテナ／宮崎県林業技術センターが開発した育苗システム。
樹脂シートを筒状に丸めて培地を充填するのが特徴

事

私たちのチャレンジ！

例



LEDの光がこぼれるウッドキャンドル



ミズナラのウッドキャンドル

ウッドキャンドルで町おこし あしよる岐志会「北海道」

「山を支える志と
新たな道を切り開く」

北海道東部に位置する足寄町は、農林業を基幹産業とし、町の面積の82%を占める森林は豊富な資源を蓄えています。

平成23年5月に町内の若手林業関係者が集い、林業グループ「あしよる岐志（きし）会」が結成されました。グループ名には「山を支える志と新たな道を切り開く」との意味が込められ、足寄町の森林・林業・木材産業の発展に寄与



雪原を炎で照らす
カラマツ製のウッドキャンドル

し、緑豊かな町づくりに積極的に貢献することを目的としています。結成時の会員は7名でしたが、年々増えて現在12名、平均年齢は38歳で道内の林業グループの中では若く、活発な活動を行っています。最近では、小学生や地域住民などを対象とした木工教室を開催するなど、木育に関する取り組みにも力を入れています。

今回、地元の森林資源を有効活用した「ウッドキャンドル」の製作・販売を通じた町おこしの取り



ミズナラのウッドキャンドルと「足寄のたきつけ」

組みを紹介します。

厳寒の雪原に灯を

きっかけは、グループ員と町の林業関係者や商工会関係者の交流会の場で、「近隣の町では冬のイベントがあるが、足寄町にはないので町を盛り上げるためにも何かをやろう」となったことで、豊かな森林資源を生かした「ウッドキャンドル」を作り、アイスキャンドルとのコラボで、町を灯すイベントとして企画しました。

平成24年の冬から始まったイベントは、その名もズバリ「ウッドキャンドルナイト」と命名され、



グループ員によるウッドキャンドルの作成

キャンドルの切れ込みから燃え上がる炎は、冬の雪原で幻想的に輝きます。また、ウッドキャンドルの中にLEDライトを灯すと、炎とはまた違った趣で会場を照らし、来場者の心に強い印象を焼き付けます。

ウッドキャンドルを商品化

ウッドキャンドルの炎を観た来場者の口コミから、町外でのイベントにも声がかかるようになり、量は少ないながらも商品として販



結成当時のグループ員。右から3人目が佐野会長

るオガ粉を利用したキャンドルの着火材も地元NPO法人で製造し、「足寄のたきつけ」と称し販売しています。

このウッドキャンドルは町の観光協会の一つ1500円から販売しており、この収益を積み立てて、将来は、林業の先進地でもあるオー

ストリアへの視察研修の実施を目標としています。

発足以来会長を務めるアイデアマンの佐野さんは、「林業グループが前面に出るのではなく、色々なきっかけ作りをして、今後も町おこしに協力をしたい」と謙虚に話されていました。

*まとめ

十勝総合振興局森林室普及課
主査（計画指導） 野田哲也

（所属は執筆時）

平成28年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧

グループ名		活動内容	対象学校
北海道	北海道林業グループ協議会	インターンシップ、交流会 女性林業者への安全研修会 女性への林業就業の働きかけ	岩見沢農業高校、帯広農業高校、旭川農業高校
青森県	青森県林業研究グループ連絡協議会 青森県グリーンマイスター協議会 貝守林研Ｊｒ	インターンシップ 森林・林業体験学習	五所川原農林高校
岩手県	★西和賀町森林組合青壮年部（８頁）	インターンシップ 女性林業者への安全研修会	西和賀高校
宮城県	仙南フオレストクラブ ★鳴子林業研究会連絡協議会（28頁） 津山町林業研究会	インターンシップ インターンシップ、森林・林業体験学習 インターンシップ、森林・林業体験学習 交流会	柴田農林高校 小生田農林高校 古川工業高校、石巻工業高校 秋田北鷹高校
秋田県	北秋田森林・林業振興会 山形県林業グループ連絡協議会 庄内林業研究会	インターンシップ	庄内管内の高校生
山形県	朝日町愛林会 福島県林研グループ連絡協議会 田人林業研究会	森林・林業体験学習 女性への林業就業の働きかけ 女性林業者への安全研修会 インターンシップ インターンシップ インターンシップ	
福島県	館石地区林業振興協議会 茨城県林業研究グループ連絡協議会 栃木県林業振興協会	森林・林業体験学習 女性への林業就業の働きかけ 女性林業者への安全研修会 インターンシップ インターンシップ インターンシップ	大子清流高校 鹿沼南高等学校 ICSカレッジオブアーツ 清洲第2小学校、上粕尾小学校 宇都宮大学等 宇都宮大学等 那須拓陽高校等
茨城県	★日光地区木材流通研究会（12頁） 鹿沼地区林業振興協会 日光市林業振興会小来川支部 今市里山育成会 大田原市林業振興会	森林・林業体験学習 インターンシップ インターンシップ インターンシップ インターンシップ インターンシップ	
栃木県	フオレストワークスクラブ@とちぎ みかも千年の森づくり会 NPO法人フオレストぐんま 埼玉県森林協会林業研究グループ部会 西川林業クラブ	森林・林業体験学習 インターンシップ 森林・林業体験学習 インターンシップ 森林・林業体験学習 インターンシップ	秩父農工科学高等学校 君津青葉高校 多摩工業高校
群馬県	千葉県林業研究会 千葉県林業研究会夷隅支部 特定非営利活動法人 青梅林業研究グループ 八王子市林業研究会	森林・林業体験学習 インターンシップ 森林・林業体験学習、その他（普及啓発） 森林・林業体験学習 森林・林業体験学習	
東京都	新潟県 佐渡グリーンフーカー会 富山県林業研究グループ協議会 魚津地区林業研究グループ協議会 石川県林業研究グループ連絡協議会 富来林業研究会 輪島市林業研究グループ	森林・林業体験学習 インターンシップ 森林・林業体験学習 インターンシップ 女性への林業就業の働きかけ 女性林業者への安全研修会 インターンシップ インターンシップ インターンシップ インターンシップ	志賀高校 津幡高校 大聖寺高校
新潟県	★河北郡林業研究会（32頁） 加賀林業研究グループ 穴水町林業研究会女性部 山梨県林業研究グループ連絡協議会 長野県林業研究グループ連絡協議会 佐久林業士会 諏訪林業士・GM会	森林・林業体験学習 女性への林業就業の働きかけ 女性林業者への安全研修会 インターンシップ インターンシップ インターンシップ インターンシップ 森林・林業体験学習	山梨県立農林高校 県下高校 佐久平総合技術高校、小海高校 岡谷市立湊小学校
山梨県			
長野県			

[illegible]

★は、本情報集第1部で紹介しているグループ。グループ名の下に数字は紹介頁をさす。

編集スタッフ———白石 善也
森 順子
石井 圭子
吉田 憲恵
只野 正人
本多 孝法
高橋 香織

レイアウト———森本 唯

装丁———クリエイティブ・コンセプト（根本眞一）

平成 28 年度
多様な担い手育成事業

森林・林業の担い手を応援！
地域の担い手を応援する林研活動情報集

発行———2017 年 3 月 15 日

発行者———田爪 弥栄

発行所———全国林業研究グループ連絡協議会（全林研）
〒 107-0052 東京都港区赤坂 1-9-13 三会堂ビル
電話 03-3583-8407
FAX 03-3583-8465
webサイト <http://www.ringyou.or.jp>

編集———全国林業改良普及協会

印刷・製本所———三報社印刷 株式会社

Printed in Japan

- 本書に掲載される本文、写真のいっさいの無断複写・引用・転載を禁じます。
- 著者、発行所に無断で転載・複写しますと、著者および発行所の権利侵害となります。

